分散会１

司会者　　仲村　康子
記録者　　今永　泰生
会場責任者　宇都宮　晋

北海道占冠村教育委員会

藤本　武　氏

占冠中央小学校コミュニティ・スクール（以下 CS）の取組

平成 26 年５月に占冠村中央小学校が初の CS となり、平成 28 年度からは村内３校の小中学校が CS に指定されることとなった。現在、学校地域支援本部を中心として、放課後の見守り、読み聞かせ、山菜料理教室などのボランティア活動を実施している。また、北海道大学、星のリゾートトマム、占冠村で三者連携協定を結び、「雪の学校」、「川の学校」といったプログラムも行っている。さらには、村内の学校間でのテレビ会議システムによる遠隔授業の取組も始めている。

今後はこのような取組を進めながら、義務教育学校や小中一貫を推進し、占冠学園構想の実現に向けた準備をしていく予定である。

広島県尾道市　NPO おのみち寺子屋

加良　莉夏　氏
金尾　百恵　氏

第 14 回人間力育成塾

８月上旬に小学４年生から６年生までの 100 名が尾道市内 100km を４泊５日で歩き抜く事業（＝おの 100 挑戦隊～感動創造の旅～）を活動のメインとしている。教育目標は出会い、挑戦、忍耐力、感謝、感動である。この事業に向けて、学生はコミュニケーション・シミュレーション能力の開発や事前ルートの確認など１年間を通して準備を行っている。また、銀山街道の整備（尾道～石見銀山）や保護者参加事前研修会を行うことで、地域や家庭との協働体制も生まれてきている。小学生の時のこの事業の参加者がボランティア研修生、高校生スタッフ、学生スタッフ、実行スタッフの役割を担うなど、役割の好循環ができあがってきており、持続可能な社会へつながっていくと考えている。

プロジェクト地球っ子ひろば（愛媛県新居浜市）

射手　建雄　氏

子どもと親の自然体験ファーム

新居浜市大生院の耕作放棄地を復活させた畑と森で、出会う生きものたちと直接楽しく触れ合い、自然に親しみ、自然を知り、自然を大切にする心を育む機会を親と子どもたちに提供しているボランティア団体です。自然を直接体験するゲームを取り入れたプログラムを設定し、参加者が共に苦労しながら楽しく農作業や農産物の加工作業が体験できるような工夫を行い、活動から、自己と自然との関わりに気付かせ、命あるものが共に自然の中で生きていくことの大切さを感じさせようとこころがけています。今後は、米づくりと森づくりをあわせた活動や、他の活動グループとの協働・相互支援、次世代が自然に配慮した開発を担った際の糧となるような自然体験活動に取り組んでいきます。

質疑応答

占冠中央小学校 CS の取組

Q1　地域が高齢化しているが、子どもたちの笑顔で大人たちも元気になっている。高齢者たちからはどのような声があがっているのか？

→　CS を作る際に高齢者たちを巻き込み（高齢者大学）、高齢者の意見をもとに、活動が選定された。「学校から地域」の流れが「地域から学校」に転換した。

Q2　長期休業中の学生による宿題等のサポートはどのようなものか？

→　期間は３日間、短期集中で宿題を終わらせる。高齢者と大学生との連携も深まった。

Q3　多くの方と連携するうえで、橋渡しする方法は？

→　地域コーディネーターや教育委員会などが行う。地域から学校に直接行く場合もある。ただし、無理にお願いするのではなく自然な流れでの活動となるように意識している。CS の取組を通して「つながり」の大切さを実感している。

第 14 回人間力育成塾

Q1　小学生時に体験した子が何人くらいスタッフとして参加しているのか？

→　過去に歩いた子たちに手紙を送っている。今年度は中学生 23 名、高校生６名の参加があった。

Q2　公共施設のプールや体育館を借りる手続きはどのように行っているのか？

→　実行スタッフがあらかじめ許可をとっておく。その後学生スタッフが学校を訪問してあいさつして細かい手続きを行う。

Q3　活動中の食事はどのようにしているのか？

→　学生スタッフが準備している。食中毒には十分配慮するようにしている。

Q4　この事業の対象となる小学校数や児童数はどの程度であるのか？

→　尾道市内の小学生には全員に、市外の小学校には１校につき１通だけ案内を出している。90％は尾道市内の小学生、10％は市外の小学生である。今年度は 100 名参加定員のところ 84 名の小学生が参加した。

Q5　子どもたちの歩く時間はどの程度であるのか？

→　午前６時から途中休憩を入れながら午後３時まで歩くようにしている。

Q6　学生が感じた思いや考えを発表する場はあるのか？（学生の人間教育となっている）

→　フィードフォワードにて発表している。

子どもと親の自然体験ファーム

Q1　子どもたちが集まりにくいとあったが、参加募集はどのように行っているのか？

→　１年を通してインターネットで募集をかけ、そこから拡散している。最初に来た子たちが年間を通して来る場合が多い。学校からの呼びかけはしていない。

Q2　子どもたちにどこまで環境問題に関する考えが伝わっているか

→　この活動で子どもたちには環境問題の話はしない。社会に出たときに思い出せばよいと考えている。想像力がある人が育ってほしい。

Q3　保護者の方は完全に参加者となるのか？保護者に目的が伝わっているのか？

→　保護者には目的をしっかりと伝える。来る保護者は子どもに自然体験をさせたいと

いう思いが強い。新居浜地区は転勤族が多いので、その人たちがよく参加する。
Q4　高学年になるにつれて参加者数が減っているとの話があったが、継続的に参加してもらうための手立ては行っているのか？
→　とにかく楽しい活動を準備する。しかし、危険が伴うので親子参加が原則であること、スポーツ少年団の活動が優先されることから、高学年の参加がどうしても減ってきてしまう。

全体での話し合い・フリートーク・質疑応答など

○　各事業に父親が集まらない理由はあるのか？
→　やはり父親は休みたい。幼児っぽい遊びは控えめになるのかもしれない。
→　父親を本気にさせるような、父親が必要とされるような内容を計画してはどうか。
→　愛媛県では愛護班・子ども会といったものがある。大人自身が楽しまなければ、子どもも楽しまない。大人も子どもも満足するような活動を考える必要がある。
○　学年に応じて遊びへの取り組み方が異なってくる。温度差を埋めるような活動を考える必要がある。
→　１番小さい子に合わせて活動を考えなければならない。下級生から上級生までを楽しませることは難しい
○　いぬねこの会の活動紹介（発足して２０年）。動物愛護を通じた社会貢献活動を行っている。自分の命、友達の命、動物の命を大切にする。
→　自分の娘が不登校になった時　柴犬を飼った。犬小屋にいって寄り添って寝るように。動物の温もりを感じることで学校に行けるようになった。動物には不思議な力があるのだと思う。
○　高齢者と子どもたちとの関わりを深めていくためにどのような取組があるのか？
→　もっと裾野を広げていきたい。保育所とデイサービスが一緒になっていくのでは？
→　まず小学生を行かせ、そこで働いている様子などを見てもらう。施設の人たちを学芸会などに招待する。
→　高齢者は小さい子たちと接したいと思っている。高齢者に授業をしてもらう。戦後の話に高学年は興味をもつ。高齢者は話をしたがっている。
→　公民館に高齢者を呼んで昔遊びのブースを作り、スタンプラリーを行っている。しかし、感染症や交通手段などの課題もある。
→　高齢者大学を通したり行政区の回覧板を活用したりして、高齢者へ連絡をする。
占冠村は人口が少ないので、子どもたちの名前も全員知っている。
今、怒る高齢者がいない。悪さをしても怒る人がいない。
○　認定NPO法人に取り組もうとしている団体はあるのか？
→　いぬねこの会は四国で１番にとった。国税庁長官の許可がいる。寄付金を増やそうとすることがねらいではなく、社会的信用を増やしていこうと考えた。
○　子どもが変わったと感じる瞬間は？
→　自閉症の子が自然体験をすることで社交的になる、話をするようになる。生き物に何も触れなかった子が生き物に触れるようになる。触って感じることが大切。
→　別の長距離徒歩でリタイアを促した際の子どもの言葉「前の 80 キロが０になるじゃないですか」→　苦労した分、生まれてくることがある。

分散会２

司会者　　兵頭　智
記録者　　森口　朝子
会場責任者　遠藤　敏朗

秋田県北秋田市生涯学習課

阿仁鉱山（やま）交流プロジェクト～愛媛県立新居浜高等学校ユネスコ部を迎えて～

松田　淳子　氏

少子高齢化が心配されている秋田県だが、地域をつないでいくのは子どもたちなのではないかと考え、地域と子どもたちをつなぐことを大切なことと考えている。阿仁合小学校（全校 31 名）の総合の学習の時間に、ふるさとを知る学習として「小学生による観光ガイド」をしようと平成 25 年から自発的に活動を進めてきた。平成 28 年 7 月 23 日には、「新居浜南高校ユネスコ部」の生徒のガイドを務めるなどの交流会を実施した。また、「秋田大学海外鉱業研究会」の学生との交流も図った。ガイドの活動として、年間 5～６回観光ガイド体験を実施した。大人の方々に喜んでもらっていることが自信に変わり、ふるさとへの愛着心が強まった。そして、バス会社からガイドの指導を受けることなどで自発性も高まり、街のよさに気付くことができた。さらには、大人の意識も変わり学校と地域との絆が深まった。これらの活動は、北秋田市と新居浜市との夢の架け橋ともなるプロジェクトとなった。

静岡県牧之原市政策協働部地域創生課

地域と高校生との対話による学び合いの場のコンファレンス

松井　工　氏

これまで「地域の絆づくり事業」を実施するなどいろいろな事業を展開してきた。それらの事業から見えてきた課題を解決するために、多様な人との「対話の場」を作り、市民ファシリテーターの育成に取り組んでいる。多彩な講師陣を招いて学校の会議室で高校生や大人を対象に、ファシリテーション研修を実施している。グラフィックファシリテーションという絵で会議を記録するという手法を用いて、視覚的に話合いのときの気持ちまで分かるようにしている。また、「平成 28 年度地域リーダー育成プロジェクト」として、『地域に誇りをもつ』などのねらいをもって、５回の学びあいの場を設けた。大人と高校生が一緒になって地域課題の解決や地域に愛着を持つ人材を育成するための対話型ワークショップを行い、高校との協働による地域リーダーの育成を目指している。

白井歌声喫茶グループ(愛媛県新居浜市)

高齢者の生きがいと健全な子ども育成の創出

近田　浩　氏

平均年齢 78 歳（最高齢 92 歳）29 名で構成している。白井自治会の福祉部の活動は年間５回の行事（学習会など）を実施しているが、年５回では少ないという声が聞かれたため、アンケート調査を実施した。アンケート結果から歌の好きな人が多いことが分かり、歌を歌ったり聞いたりすることは認知症予防にもよいということで平成 23 年２月に歌声喫茶グループを発足した。市生涯大学のミュージックセラピーの受講に合わせて行った。使用場所は自治会館とした。自治会からの助成金は出なかったため、参加費を１回 100 円徴収した。福祉部の活動と違い役員がいないため、輪番制で行い、年間 30～40 回も自主的に運営している。歌声や学習会を中心に健康づくりとして「にいはまげんき体操」やヨガ、サロン活動としてお手玉や折り紙などを行っている。成果発表の場として時にはボランティアに出掛けて交流をはかっている、これは高齢者の介護予防・引きこもり・孤立防止の歯止めにもなっている。子どもたちには高齢者が元気に頑張っている姿をもっと見てもらい、子どもへの情操教育や健全育成に役立ちたい。合わせて地域の活性化につなげたい。出来れば新居浜市と言えば「にいはまげんき体操」と言われる市にしたい。

秋田県北秋田市生涯学習課の実践について

【表記について】
質問「Q」　回答「A」　感想「感」　司会者の発言「司」

Q　秋田では３つの学校がボランティアガイドをされているが地域支援本部と絡めて活動を進めているのか、学校のほうから自主的に進めているのか。

A　北秋田市では、阿仁ぶらぶらガイドの方がコーディネーターをされている。学校からの要請に合わせた人材を学校に送っている。その後、学んだ成果を発表する場として子どもたちがガイドをすることになった。ガイドをすることがねらいで進めていったのではない。

Q　他の３校も同様か。

A　北秋田市では、伊勢堂岱縄文館も含め、大人の観光ガイドは 40 人ほどいる。子どもたちがガイドをするために、退職された教員の方や大人のガイドの方などが協力して、夏休みなどを利用してガイドを土日限定などで実施している。

Q　人口に影響はあるか。

A　学校は地域のための学校ということで地域の願いを受けながら取り組んでいるが、あまり人口の変化はない。しかし、移住と定住などについて発信をするなど大人が動き始めている。「Ｇちゃんサミット」なども行ない、15 年ぶりにお祭りを復活させるなど地域づくりを始めた。また、都会の子どもたちとの阿仁マタギ体験交流を行うなど、民間団体や企業と連携が強まり、子どもたちの頑張りが引き金となった良いサイクルが生み出されている。地域ぐるみの学習を進めることにより、大人の気持ちを動かすことができると考えている。学校と社会教育が一つになるためにも、企業や学生との連携を重視しながら、見生の大人の育成を図りたい。

静岡県牧之原市政策協働部地域創生課の実践について

Q　高校の県の教育委員会から何か言われることはないのか。

A　県の教育委員会の課長さんに事業を紹介したところ、話を聞いてもらう体制を作ってもらうことができた。

Q　周知方法はどのようにしているのか。また、どのような高校生が参加しているのか。生徒会役員などの参加を呼びかけたのか。人数の制限をしたのか。

A　榛原高校は、昨年度は半強制のようだったが、今年度は募集をかけたらたくさんの希望者がいた。他の高校は部活動や生徒会などでリーダー格の生徒や３年生全てなど学校によって異なる。

Q　人材育成や今後の実践について。地域の中に入っていくのか。

A　教育委員会が立ち入れないところまで今回の事業で学校ともつながることができた。地域の人々の人材育成を目指して、（高校生や大人を対象とした）市民ファシリテーターの実践の場を充実させている。それは、学生の育成にもつながっている。これからも高校に入り込んでいくのが課題である。実践の場がたくさんある。地域の絆づくり事業で、地域の課題を見つけて解決していく。事業に高校生が入ってきてくれたら今回の事業が実を結んでいくのではないかと思うが、自分たちが強制的に連れて行くことはしない。

Q　ファシリテーターは自分の地域で活動しているのか。

A　自分の地域で活動をしている。地域にファシリテーターがいないときは他地域の人が応援している。

Q　人集めはどうしているのか。

A　地区長さんにお願いしている。自主的な人は少ないので、意欲的な人に声を掛けていく。

Q　別の活動の講師が豪華だったが、この事業の講師もされているのか。

A　先ほどの講師陣は今回の事業の講師である。別の事業では育ってきた高校生が運営を学ぶなど事業が深まりをみせている。

Ｑ　コンファレンスに市役所の職員は入らないのか。すごく成長することが出来る場なので、市の職員が新人研修などで入ることにより本気の話合いになるのではないか。

Ａ　現在は基本的には入っていない。関わってもらってその人が発信するのがよいが、他にも公共施設マネジメントの問題など地域のモチベーションを高める活動があるので、なかなか難しい。

感　市長も活動に参加しているし、本気の場に高校生を入れてあげて導いてあげたらよいのではないか。大学教員としても、こういう高校生に大学に来て欲しい。すばらしい活動である。

Ｑ　積極的な先生なら参加するが、参加しない場合もあるのではないか。学校自体に断られることはないのか。

Ａ　一番の進学校も参加している。学校に一人でも熱い先生がいれば出来る。一番の進学校が参加出来たことで他の学校も取り組むことが出来ることが分かった。

Ｑ　新居浜市でも頑張った先生がいたから出来た。頑張った先生が入ればよいが、現実的には難しいところがあるのではないか。頑張る先生の人材育成のためには、どうしたらよいか。

Ａ　各学校に必ずやりたいと思う先生はいるが、その人が市とつながるかは難しい。学校全体でやる気をもって他の先生を誘って活動に行くなどしていくと、中心となる人がいなくなっても大丈夫である。

司　自分がどんどん熱くなっていけばやりたいと思う人も出てくるのではないか。

白井歌声喫茶グループの実践について

（にいはま元気体操の様子）

※　まず、全員で「にいはまげんき体操」（体操の最後は新居浜市歌入り体操で持参したマンドリンで伴奏）を実施、次のお手玉体操は、お手玉を一つもって歌に合わせて体を動かした。

感　高齢者の比率が高くなるとあったが、健康であれば高齢者と言われることはない。

Ｑ　「にいはまげんき体操」をラジオ体操の代わりにすればよいのではないか。

Ａ　教育委員会が動いてくれれば可能なのではないか。

感　この体操をゆるきゃらが踊るとか、教育委員会とコラボして出来ればよいのではないか。ラジオ体操秋田バージョンなども実施している。

感　歌声喫茶グループは地区のものだが、広域化してもよいのではないか。自治会から何かをもらっているわけではなく自発的にしていて楽しい会なのでもったいない。

Ｑ　このグループの人が自治会の役員になることはないのか。その時は大変なのではないか。

Ａ　大変だが両立している。この活動は助成金に頼らずボランティア精神でやっている、タクシーを乗り合わせるときなども各人が 100 円ずつ出すなど細かい取り決めをしている。幼稚園に行くときは、手作りのプレゼントを持っていく活動もしている。

　今日は、このような場所で発表まで出来るとは思わなかった。感謝している。昨年、助成金をもらうことも出来て、みんなが非常に喜んだ。トップは言うよりも率先して動くことが大事で、これが自分の健康、信頼にもつながる。リーダーの私は妻の援助が大である。今後、小学校・中学校にも可能ならば、活動の場を広げていきたい。最近、歌声にお手玉を取り入れ練習している。小学校のクラブ活動に出向きボランティアを月 1 回行っている会員もいる。

Ｑ　秋田でも行っているが、いろいろな場所で体操をしてもよいのではないか。

Ａ　様々な交流の場でこれからも「にいはまげんき体操」を普及させていきたいと思います。

分散会３

司　会　者　清家　　卓
記　録　者　上田　　謙
会場責任者　大森　茂樹

福島県会津坂下町

「子どもがふみだす　ふくしま復興体験応援事業」は、東日本大震災後の県教育委員会復興支援事業である。これまでの様々な支援に対して、子どもが主体となって復興に寄与していく社会体験活動である。「避難者を元気に」「一人一人が復興大使」「ふくしま発信」を柱に、様々な活動に取り組んでいる。柳津町立西中学校では、地域のアントレプレナーシップ育成教育（起業家教育）に取り組んでいる。「地域を魅力的にし、地域を活性化するために」をテーマに、観光パンフレットづくり、農産品の栽培・販売、地元温泉の新たな土産物の開発を行っている。その過程で生まれた「ひしストラップ」は大変好評で、地域の民芸品として認知されつつあり、地域の方との連携で、地域の活性化に大いに寄与している。

西中土産　「ひし」

岡山県岡山市立中央公民館

岡山市立中央公民館で実施している「食のソムリエっ子講座」は、小学２～３年生を対象とし、「子ども自身が食に関心をもってもらう」をテーマに開発プログラムとして実施した。核家族化、共働きなどのライフスタイルの変化を踏まえ、子どもが主体ではあるが、「食の大切さ」を通じて、その向こうにいる家庭もターゲットにしている。この講座は、単に食に関する知識や技術だけでなく、食に対して自らが正しい行動ができることを目指している。具体的な到達目標としては、「炊飯し、三角おにぎりが握れること」「煮干しで出汁をとり、豆腐や野菜などの具材を切って、味噌汁をつくれること」など大変ユニークな取組を実施した。また、子どもたちの意識が持続できるよう、定期的にペーパー試験を取り入れ、ソムリエっ子認定を行っている。栄養士や地域の方々などのサポート体制が充実しているのもよい。

重森　しおり　氏

久米ふれあい食堂（愛媛県松山市）

「久米ふれあい食堂」は、孤食対策事業の一環として、久米公民館と地元企業がコラボして実施している取組である。孤食が大きな課題となっている現代、子どもや独居老人を対象に、栄養バランスの取れた食事を提供し、「一人にさせない地域づくり」の意味合いも含まれているこの取組は、今後の地域ネットワークづくりの一助になると考えられる。現在も、独居老人、子ども、ボランティアの週１回のふれあいの場所になっている。運営については、調理手伝い、寄付金、食材提供など、その多くがボランティアで行われている。地域住民はもとより、企業や大学など、この事業の趣旨に賛同していただいたことが大きな要因と考える。今後の課題としては、一部に負担がかからないよう、持続、継続が可能な事業にし、開催場所の増加や施設設備の充実、資金確保なども挙げられる。

分散会内容（質疑応答）

ふくしま復興体験事業・福島復興公民館大学

Ｑ１　関係機関との連携と収益金の用途は？

→総合的な学習の一環として実施し、地域の方々への「ひし」の由来等を訪問調査。その後、生徒がデザインし、独居老人の方が作成するシステムを構築し、文化祭で販売した。地元の観光協会との連携により、地元ホテルや道の駅など、販路を拡大することができた。収益金は、生徒の活動費に還元した。

Ｑ２　中学生と地域や高齢者との交流と今後の取組について

→学校と公民館が隣接しており、公民館が学校と地域をつないでいる。日頃から、様々な交流が可能なのは、公民館が支援コーディネーターの役割をし、地域のキーパーソンを確保したから。学校だけでは教員の確保が難しいので、公民館の協力が不可欠。また、校長がリーダーシップを発揮し、積極的に地域と連携することで、保護者の協力体制もできた。地元の要望が強いので、今後も継続する予定である。

Ｑ３　復興公民館大学について

→異業種のメンバーがいることで様々な視点からプログラムを企画することができる。活動プログラムについては、「体験が第一」と考え、子ども中心のものを企画していく。地域とのつながりが希薄になっているので、公民館を中心に、地域ネットワークの再構築ができればと考えている。

岡山県立岡山市立中央公民館

Ｑ１　中央公民館の役割

→市内３６公民館を統括し、全市的・モデル的な事業も実施している。職員は各公民館内で異動するので、地区館で専門性を発揮できる。事業によっては、スタッフ不足や予算面から地区館に広がらないものもある。各地区館や団体の良さを活かせるようにパッケージ化していくのも今後の課題である。

Ｑ２　スタッフの確保と予算について

→スタッフについては、公民館職員を始め、学校栄養士、シニアソムリエなど、２７名の参加者に対して、５～６名が企画運営を行っている。予算面の問題から、全てがボランティア、有志で参加していただいている。謝金関係を材料費にまわすことで、参加者の負担を減らしている。

Ｑ３　具体的な実習内容

→栄養士のアドバイスを受けながら、一番出汁つくり、野菜の切り方、おにぎりの握り方を身に付けていく。ただ切って塩を振っただけの野菜も、自分で調理することでおいしく感じる。

Ｑ４　地区館に広げていくための課題

→プログラムを細かくしないようにすることで、地区館の良さを取り入れていけるのではないかと思う。スタッフの確保は、地域住民やこの講座を経験した子どもたちが、補助スタッフとして関わっていくとよい。

久米ふれあい食堂

Ｑ１　事業スタートまでの経緯

→地域のつながりが薄くなってきたので、「孤食」をキーワードに、地域ネットワークの再構築をしたかった。久米地区はボランティアなど社会教育に参加している方が多く、人材が確保しやすい地域。企業側としては、フードサービスの栄養管理、介護事業のノウハウを生かしながら、地域貢献を模索していた。

Ｑ２　運営について

→参加者は、子どもから高齢者までと幅が広く、小学生は７～８人、高齢者は５～６人。それらにあったメニューを考えている。毎週木曜日に実施し、火曜日までに事前申込みが必要で、食物アレルギーのない人に限定。参加費は、子どもは無料、大人は１００円。調理スタッフについては、ほとんどがボランティアで、地域の方々や、学校、大学生なども協力していただいている。約３０名を４、５班に分け、ローテーションを組みながら１０名で担当している。参加者、スタッフ分を含め約３５食を調理している。

Ｑ３　食材の確保

→メニューを１か月前に出して、食材の寄付を募る。久米地区は田園地帯ということもあり、多くの方に食材を寄付していただいている。寄付者は、公民館広報に記載している。

Ｑ４　今後の課題

→この事業の意義は大変大きいので、開催場所の拡充、資金面の確保に努めていく必要がある。また、誰でも参加しやすい事業にするためには、送迎や施設のバリアフリーなどのハード面も充実していく必要がある。

最後に

　地域のつながりが希薄になっている現代、地域活動に参加することの意義は大きい。公民館、ＮＰＯ団体、子ども会など、各団体がそれぞれのアプローチで、地域ネットワークの再構築をしていくことが重要となってくる。参加する側も運営する側も、人との交流の中で、生きがいを見つけることができる。社会教育は、家庭教育、学校教育等、様々な教育を「補完」しているのではと考える。

分散会４

司会者　光沖　真治
記録者　橋本　尚子
会場責任者　小笠原貴久

西予市城川町　メニークエスト

藤田　恭裕氏

地域おこし協力隊として西予市城川町へ。合同会社を設立し、城川町土居地区の方々とともに、経済を生み出し、循環させ、地元を活性化させようと取り組んでいる。初めは公民館を拠点に地元の方々と話し合いを重ね、ゆずと栗を使った特産品を作り出した。また、廃校の給食室でモンブランを作り、ネット販売で売る計画も立てている。人口減少が進む町ではあるが、東京で地元の野菜が売れる瞬間を子どもたちに見せたり、売上金で東京散策をしたりするなど、自分たちの活動が東京の人たちに受け入れられる経験をすることで、子どもたちが受け継ぎたいという思いをもてるようにしている。地元で経済を循環させ、経済的に良い方向に進んでいくように、また、地域の方々とともに地元を盛り上げていくという気持ちを忘れずに、これからも会社経営を続けていきたい。

広島県広島市　広島県教育委員会豊かな心育成課

大名　克英氏

子どもの豊かな心を育てることを目的に、全県の５年生を対象に３泊４日の「山・海・島体験活動」を行っている。島の子どもが県北で雪を体験したり、民泊を体験したり、学校で飯盒炊爨をしたりと、内容は多岐に渡って行われている。広島県内全域でバスの送迎を実施したり、看護師派遣制度を設けたりと、活動への協力体制も作られ、現在は広島県内公立小学校の約 80%が実施している。

また、この活動をするにあたって手引きを作り、ねらいの明確化を図った。さらに手引きを使って研修を深めるため、実践発表会を行い、家族からの手紙を発表したり、地元から離れた場所で故郷を見つめ直す活動を発表したりした。子どもたち自身が活動の内容を発表するだけではなく、活動前の自分たちの課題や活動を通して得られたことを発表することで、自分たちの成長について改めて考えることができた。これからも様々な方や組織の協力を得ながら活動を進め、様々なニーズに対応できるようにしていきたいと考えている。

伊予市双海町　読み語り隊

冨田　敏　氏

双海町内の３つの小学校で、朝の読書タイムの際に読み語りをしている。大人１４人で活動をしていたが、私たちもやりたいという子どもたちが現れ、子ども読み語り隊が結成。現在、46 名で活動しており、老人ホーム、施設、保育所などを回って紙芝居を読んでいる。人形劇、デジタル紙芝居など、毎年様々なことにチャレンジしているが、変わらないのは伝承をモチーフにすることである。子どもたち自身で民話を読み取り、紙芝居を作成しているので、最後がハッピーエンドになることもある。また、作画は昔は子どもたちでやっていたが、今は、先生方のご指導を得て紙芝居を作成している。〇〇のために…という意識ではなく、自然と体と心が動く子どもを育てたい、故郷に愛着のある子どもを育てたいという思いで活動している。

質疑応答

メニークエスト

Q1 公民館と地元の組織が関わって、事業が進んでいる。地元の懐が深いのは歴史的なものなのか？

→城川は、公民館を中心とした活動が盛んで、公民館が地元の思いに応えてくれる土壌がある。今までは公民館と住民との近い関係がありながら、一歩踏み出せずにいたが、今回協力隊が入ったことで、どういうことが地域活性化につながるのか、経済活動や福祉、教育など様々な面から話し合うことから始めることができた。時間を要したが、一人一人の住民と意見交換ができる環境が、城川町にはあった。また、ふるさと創生会という公共的な団体があったからこそ、地域にお金を還元するという目的で活動することができるようになった。

Q2 地域おこし協力隊として入ったときに、テーマはあったのか？

→西予市はジオパークに関わることがテーマの宇和町を除き、フリーミッションである。しかし、志を持っていないと、３年がすぐ過ぎていく。また行政側にある程度の受け入れ体制やノウハウがある。協力隊自身が民間出身で、行政の仕組みに慣れたり、地域に溶け込んだりすることができれば、西予市は住みやすい場所である。

Q3 軌道にのってどれくらいか？

→協力隊として西予市に入ってから、この地に定住したいという思いがあり、地元で起業して、地元の方を巻き込んで会社経営をしたいと思っている。しかし任期のあとに起業するのでは難しい。２年目、もしくは３年目に入ったときに立ち上げようと思っていた。公務員と同じ扱いになるので、行政に訴えて、非常勤特別職にしていただいて、起業した。

Q4 目下の課題、そしてこれからの展望は？

→地元が名古屋、前職が東京だったので、名古屋、東京、西予市をつなぎたいという思いがある。今はどうすべきか模索中。また、地元のしきたりや昔からある企業との兼ね合いが難しい。

Q5 地域を活性化するのに重要なことは何か？

→地域の活性化のためには、まずは地域を知ること。意外と地元の方でも知らないことがある。地元を知らない孫世代は、東京のお客様から「どうやって作っているの」と聞かれたときに、子どもたちは答えられない。そうなったとき、地元に帰った時のお手伝いの中身・気持ちが変わる。地元を知ろうとする。子どもたちは、夢中になることを見つけられたらどんどん変わっていく。体験活動を通して、子どもたち自身が何かしようとする。そこをサポートしていきたいと考えている。それが、未来につながる地域活性化につながると考える。

広島県教育委員会

Q1 体験活動で宿泊先が増えたということだが、宿泊先となるまでの経緯は？

→社会教育主事としては、地域の教育力を活用するためにできることはないかと思っているが、学校には活動を進めるためのノウハウは少ないという現状がある。公民館の宿泊ができないという問題は、広島ではなかった。目的がはっきりとしていれば、公民館でも宿泊ができるのではないだろうか。また小規模校ではたくさんの学校が集まって、複数の公民館に泊まるなど、様々なバリエーションがある。

双海町では７泊８日で体験活動を行っている。公民館からは初めはよい答えは得られなかったが、

宿泊可能に。サポートが大事。通学塾の卒業生がサポートに関わってくれている。

Q2 広島県からの予算はいつまで続くのか？

→児童への直接の補助金については，今年度で終了する予定である。教職員の引率旅費等への補助は継続される。各市町が主体となり実施できるようにというねらいがあって、これまで補助が出ていた。民泊であっても、プログラムを見直せば、費用は削減可能である。内容を詰め込み過ぎずに充実した内容にしていけばよい。理解を得て、保護者の方の積み立てをしていくなどの工夫が求められる。

Q3 教育効果を持続するためには、保護者の方の協力も必要なのではないか。家庭への協力依頼はどうしているか？

→自分の教え子を見ていると、体験活動のあとの顔つきが違う。体験する強みをその子に返すことができさえすれば、効果は持続する。子どもたちが自分たちで発表するなどして、意味づけ、価値づけをすることが大事。子どもが成長すれば、保護者の方の理解は得られると考えている。

Q4 活動の活性化のために必要なこととは？

→小学校では、自信をつけることが大事。学校教育では、大人でレールを敷くのではなく、自分で考え、自分で結果を求めていくことが大事だと考えている。北広島町では、地元の子どもたちに向けた民泊も始めた。「地元を知る」ということで、地元の方を講師としてお招きして、体験活動をしたり地元のことを教えてもらったりする。そういった地元の人との触れ合いが愛着心を育てていくと思う。

読み語り隊

Q1 予算がないと活動をするのは難しいと思うのだが、予算はどうなっているのか？

→読み語り隊は５年前からスタートした。紙芝居作りには紙が必要で、その費用は持ち寄りだった。そのままでは幅が広がらないので、助成金をもらっている。子ども夢基金、愛媛新聞がやっているＩウェーブなど…。資金調達のために、絵本やおもちゃを寄付してもらい、それをイベントの際に販売した。

Q2 子どもが紙芝居することのメリットは？

→市町村合併によって、資料はあるが、歴史がリセットされてしまった。子どもたちにはおもしろくないだろう、とおじいちゃん世代もあまり話をしなくなっている。子どもたちは本当に昔話を知らないので、教えていきたいという思いがあった。アイデンティティをもつ、自分の地元に誇り・愛着をもつ子供を育てたいという思いがある。

Q3 どうやって活動が広まったのか？

→読み聞かせをするとおじいちゃん世代に喜ばれる。さらに、同級生に見せるために学校で読み聞かせをした。また、お揃いのＴシャツを作ったり、読み聞かせのイベントをたくさんやったりして、人に触れる機会を作り、活動がさらに広まっていった。

Q4 過疎地域でイベントをつなぐとき、後継者がいないことが問題。「つなぐ」ということに関して、どのように考えているか？

→協力隊として赴任したが、過疎地域こそ十分つながりがあると感じる。あまり無理をしてつながり…と考えなくてもよいのでは。都会では人間関係の希薄さゆえに孤独死すらある。地元ではそれがない。死ぬまで現役という方もおられる。今は家の中におられる人を外に出す活動を考えている。町づくり学校や映画上映会等、家から出やすい状況を作ることが大事かと思う。

分散会５

司会者　川中　幸子
記録者　中井　佐衣子
会場責任者　鍵山　直人

前橋市生涯学習課（群馬県前橋市）

阿久津 哲也 氏

公民館における少年教室の果たす役割

前橋市では、M キッズサミットをはじめ、市内公民館で少年教室を開催している。学校ではなく、公民館において社会とのかかわりを体験しながら学習することで、子どもたち自身が主体的に考えるようになってほしいと願って活動している。中心市街地の空洞化や地域のつながりの希薄化への対策として始まった。中央公民館が核となって商店街を舞台に、NPO 教育支援協会北関東支部や前橋国際大学、中心商店街協同組合などと連携をして未来を生き抜く子どもたちの育成を目指して活動している。緊張から消極的な児童が多くいたが、「仕事」について体験的に考える様々なプロジェクトを通して、積極的な発言がかなり見られるようになってきた。スタッフとして参画している若者たちの基礎力の育成にもつながっているなど成果が表れてきている。

双海町こども教室（愛媛県双海町）

隅田 直軌 氏

わくわく生活体験「夕焼け村」

今年で１７年目を迎える通学合宿「夕焼け村」は、多くのボランティアスタッフの協力を得て開催しており、地域内の三つの小学校の４～６年生が６泊７日の日程で共同生活をする中で、青少年健全育成につなげることを目的としている。近年児童数の減少により、１学年１クラスという環境の中で固定化しがちな人間関係が課題となっており、また、小中学生の姿が見られない地区が少しずつ増加している。食事の準備や買い物、洗濯など、小学生が主役の集団生活を行い、「家族」を感じるプログラムや「ふるさと」を感じるプログラムなど、テーマを設定して実施している。夕焼け村には、中高大学生や地元婦人会等の様々な年齢のスタッフが関わり、参加児童のみならず参加するスタッフも含めて、地域の人々の交流にもつながっている。

愛媛おやじ会井戸端会議（愛媛県）

畝崎 優和 氏

伊台おやじの会発足について

小規模校の小学生と大規模校の小学生が一つの中学校に進学した際、小規模校出身の生徒が毎年のように不登校になるという現実から、何かできることはないかと「おやじの会」が発足した。両校には、以前それぞれに進学する中学校があったが今の中学校に統合した。１５年ほどもめ、統合するにあたりかなり苦労した過去があり、その頃のしこりがなかなかとれなかった。また、学校行事の中で両校の交流はあるものの、活動が小規模校の児童がお客さん状態になっているのではないかと考えた。中学校統合の際にもそこで、おやじの会で、小規模校を会場としたお泊まり会を実現させることができた。両校の児童が共に活動を重ねることで心の交流を深め、３年目から不登校がなくなるなど大きな成果として表れ、現在も活動は続いている。その他、地域と学校の潤滑油になったり、新たに引っ越してきた家族と仲良しになるお手伝いをしたりしながら「おやじの会活動」を積み重ねている。

質疑応答

群馬県前橋市生涯学習課（群馬県）

Q　課題解決型の活動は取組が難しい。公民館の体育行事や文化祭など、これまで行っている活動に加え、新たに社会のための活動を行うのは、業務のバランスを取るのが難しいのではないか。

A　人は増えないので、事業の中で調整を行ったり時期を変えたりしながら進めている。行政だけでは難しいので、NPO 団体などと協同的に行っている。また、公民館事業の見直しをしながら行っている。

Q　大学生の研修について

A　大学のほうで社会教育的な単位が認められている。単位を取るのが目的かなと思っていても、やってみるとおもしろくなってくるようで、細かい研修はやっていない。みなさんの意見を取り入れて良い方向に持って行く。年回５～６回の活動で進めている。

Q　小学生の募集について

３～６年の３０人程度で募集をかけてはいるが、比較的低学年の児童が多い。親のすすめから集まっているようだが、それもねらいの一つである。

Q　子どもたちの声から実現できたことはあるのか。

A　まだそこまではいっていない。子どもたちの素直な発想を大人たちが聞かなくてはいけない。子どもたちの率直な意見を大切にしていきたい。

Q　子どもの教育なのか、地域の活性化なのか、今後の展開について

A　横のつながりがあり、部局間との連携がとれる。地域の活性化をしていきながら、教育委員会の目的を達成していきたい。

Q　１６ある公民館の職員体制について

A　公民館主事１人と嘱託が４人～１０人以上、人口６～７万で公民館１館（職員が１０人）。活性化プログラムという国の委託事業でやっている。１６のうちの９館が市民サービスセンターに名称が変わっている。小さいことでやってみて評価されることや、アンテナを高くすることが公民館主事に求められている。

双海町こども教室（愛媛県伊予市）

Q　ホームシックやけんかなどが起こらないか

A　ホームシックもけんかもある。親が子どもに体験活動させたいという希望で申し込んだ事例もあり、本人は不安な様子だったが、同級生が支えてくれた。３日目くらいになると打ち解けてきて、最高の笑顔になった。子ども同士で仲よくなるようである。普段と違った環境の中で気分が高まりすぎてけんかにつながる。事情を聞き、仲直りできるよう解決する。また、時間が解決してくれることもある。

Q　予算はどこから出ているのか

A　参加費６０００円（参加者の食費）、社会教育課の予算で宿泊費（一泊１０００円）となっている。この行事の大切さを伝えて、活動を続けていけるようにしたい。

Q　メンバーは変わるのか、継続して参加する子どもはいるのか。

A　継続して来る子が多く、児童数の半分の子が参加している。３つの学校から参加していることも魅力の一つ。固定化された環境である中、３つの小学校の児童が交わりながら活動することは大変意味があり、３校の児童が同じ中学校に進学した際の人間関係にも影響しているようである。

Q　スタッフがいないからといって教員が出るとよくない。スタッフに教員は入っているのか。

A　こども教室実行委員会の中に教頭が入っているが、平日ということもあり夕焼け村の会場に教員はいない。夕食時には様子を見に来てくれる。主に東雲の学生さんや地元のジュニアリーダーがいてくれるなどしっかりした体制で行うことができている。公民館主事１年目でも、安心して活動できる。中高生のジュニアリーダーが小学生に与えている影響は大いにあり、６年生の感想の中には、来年はジュニアリーダーで参加したいというものもある。

Q　通学しながら合宿するのはなかなか大変なのではないか。

A　子どもに体験学習をさせたいという保護者もいるが、預かってもらっている間はゆっくりできるという意識の保護者もいて、考え方も様々である。

Q　常時子どもたちにかかわるスタッフは何人いるのか。

A　大人２人（公民館主事など）と大学生が宿泊。大学生は社会教育実習（単位とセット・前半５名、後半５名）夕方から学校に送り出すまでの時間がメインの活動になる。夕方には婦人会の３～４名が夕食の手伝いをしてくれる。

Q　学校の宿泊行事では、引率教員がなかなか寝られない学年もある。１週間も宿泊するのにご苦労もあるのではないか。

A　体調を崩す子もいる。毎朝の検温を行うなど、体調管理に気をつけて、学校とも情報交換しながら行っている。

○　自分の成長を意識させていくことができあがっている。子ども主体の活動を行う中で、ジュニアリーダーも育っている。何のためにしているのかが理解され、体制ができあがっている。ふるさと教育ができて、学校教育、３校同士の連携もうまくいく。単発の活動ではなく、１０年くらいのスパンで捉えて活動を進めていかないといけない。ふるさとがどれだけ子どもたちを抱え込んでいけるかが地域の教育力である。（若松さん）

愛媛おやじ会井戸端会議（愛媛県）

Q　お泊まり会自体はいつからスタートしたのか。

A　８年前から始めている。効果が表れ始めたのは３年目からである。

Q　時代の流れによって生じる問題があると思うが、今後の取組について。

A　まずは学校に出向いて学校の雰囲気などの現状を見る。また、おやじの会の活動についての話も校長の間で引き継ぎ、知ってもらえるようにしている。おやじの会を潤滑油として使ってもらいたい。教師の仕事は学力をあげること、地域のことはまかせておいてくれという気持ちで行っている。

Q　違う地域の知らない子どもたちのために熱くなることができる、その原動力はどこからくるのか。

A　自分が大きな団地に引っ越してきた際に感じたつらさ、克服した経験が原動力につながっている。

○　学校での子どもたち、地域の中での子どもたちを見て行かなくてはいけない。それぞれの立場、それぞれの役割で子どもたちにかかわっていき、足りないものは補い合いながら子どもたちを見守っていくことが大切。

○　教師や PTA と違う目線で見られる、違った形の行動力をもっているのがおやじの会のよさ。かなりのご苦労があったのが伝わってきた。貴重な話を聞かせていただき、胸が熱くなった。

○　大規模校と小規模校の子どもたちが中学校で一緒になると、同じような問題が起こることがある。中学校へ行って気後れしないように、活躍もできるようにと、様々な行事を年間を通して行っている地域があった。交流する際にはいろいろな配慮をして行っていた。不登校になると、人生が変わる。人間が変わる。大切な時期は取り返せない。このような取組を重ねていくことはとても大切である。

○　子どもたちは思っているより繊細で傷つきやすい。そのしんどさを大人がしっかりと理解し、手助けをしてくれる大人が地域にいることは幸せなことである。

分散会６

司会者　　石丸　寛人
記録者　　高田　容弘
会場責任者　本田　精志

島根県益田市教育員会

大畑　伸幸　氏

小学校を新たな子育てとコミュニティの拠点に！

益田市では、中山間地域にある益田市立豊川小学校を新たな人が集まり・活動する地域の拠点として位置付け、様々な取り組みを加速している。その要となるのが、「学校内への社会教育コーディネーターの配置」である。コーディネーターが学校と地域をつなぐことで「放課後、休日、長期休業中の学校での子どもの各種活動実施による子育て支援施設化」、「中高生の地域活動グループの活動拠点化」、「学校での社会教育活動実施による公民館化」など学校の拠点化を促している。「学校」を「学興」として、「学校教育」以外で活用を進め、公民館を耐震化の完了した学校の中に取り込むことで、行政課題である公共施設削減や子育て拠点に充実による子育て世代の IU ターンの促進、幼児から高齢者までが日常的に集う拠点作りを併せて目指している。

石井北小学校おやじの会（愛媛県松山市）

阿部　洋士　氏

ランドセルは海を越えて

石井北おやじの会では、２０１１年からは卒業生のランドセルをアフガニスタンに送る活動に取り組みはじめた。ランドセルの募集は、３月上旬にプリントを配布し、卒業生や保護者に向けて呼び掛けを行っている。今年の活動でも学校やＰＴＡなどと協力して４２個のランドセルが集まった。集まったランドセルは、おやじたちが、仕事を終えた夜に学校に集まり箱詰め作業を行った。発送費は自費なのでうまく梱包しなければならない。このとき様々な職種をもつおやじの知恵が発揮される。無事に送り届けた報告として、協力してくれた卒業生にはお礼のメッセージを送っている。おやじのネットワークやいろいろな人とのつながり、家族の協力あってできることだと感じている。

松山市立雄郡小学校（愛媛県松山市）

吉見　香奈子　氏

地域人財をつなぐキャリア教育

小学校のキャリア教育は、職業教育ではなく職業観を育むことだと考える。６年生は、地域財産として誇れる「人財」に face to face で接して語る中で、「仕事とは何か」を探りつつ生き方の手掛かりを得る。そして、自己のよさや個性を再発見し、夢に向かって伸びようとする。授業を構成するにあたって、20 余名全てのゲストと十分な事前打ち合わせを行い、職業選択のきっかけや心に残る仕事のエピソード、仕事を志す内面を支えた少年期の体験等、現時点の子どもも共感できる話をしていただいた。また、各職業の大変さや挫折経験、乗り越えることのできた理由(努力・継続・人の縁)等についても添えていただいた。人財は何よりの教科書である。６年生のキャリア授業であるが、それまでに出会い支えてくれた職業人も振り返ることで、様々な仕事の方が支えてくれる感謝や、大切にされる自身への肯定感、素晴らしい人財のいる故郷を誇りに「それに続きたい」という思いも育っており、将来への期待を感じた。

質疑応答

小学校を新たな子育てとコミュニティの拠点に！（島根県益田市教育員会）

Ｑ１社会教育コーディネーター（市川さん）と地域、学校の連絡の仕方は？また、活動にはどんな場所を使うのか？

→学校にいるのでいつでも連絡が取れるようになっている。授業中でも使っていない教室はどこでも使うことができる。あと２年で公民館を学校に入れていきたい。（学校が間借りするというような形で）

Ｑ２社会教育コーディネーターはどんな立場？

→社会教育課から派遣している。学校の職員の一員として働いている。

Ｑ３学校側はどう受け入れているのか？

→学校側も違和感なく受け入れていた。（そういう土台があった。）最初は学校の中から入っていき、徐々に地域に広げていった。

Ｑ４市川さんはどのようなつながりで社会教育コーディネーターとして来たのか？

→若者のネットワークを使っている。評価指標を設け、最低３年間の業務委託（３６０万円）契約している。ただ、定住を課してはおらず、スキルアップできる場にして欲しい。

Ｑ５学校に人が出入りするということは危険も伴うが、その対処法は？

→日常的に学校を使うことで知らない人がいなくなる。ちなみに、体験活動に参加させている親ほど将来地元に帰って来て欲しいちと思っている。

Ｑ６統廃合との兼ね合いは？

→この形でいけるところは統廃合しなくていいようにしている。

○　その他意見交流

・島に住んでいるが「島に学校がなくなったら島も終わりやね。」と話している。できる限り、廃校ではなく、休校にして欲しい。地域の話し合いに中高生を入れて話し合いをしてるが、一番刺激を受けたのは、お母さんたちだ。私たちも意見を言っていいのじゃないかと思い始めた。

・私の町では山村留学で子どもが集まり、学校と地域が一緒に活動することが自然体だった。しかし、残念ながら閉校することが決まってしまった。私たちの思いと行政の考えが違っていた。

ランドセルは海を越えて（石井北小学校おやじの会）

Ｑ１メンバーを集めるのが大変だと思うが、どのようにしているのか？

→催しのときに声を掛けている。パンフレットも配っているが、５００枚配って、返事があるのは２枚ほどである。

Ｑ２おやじの会とＰＴＡ役員の区別は？

→初代はＰＴＡ会長から始まったが、今は別である。そのため、子どもが卒業してもおやじの会に入っている人もいる。

Ｑ３中学校、高校ではおやじの会はやっているのか？
→やっていないのではないか。
Ｑ４行政との関わりについて
→情報提供してほしい。
→久万高原町などは父親がＰＴＡ活動に参加して当たり前という状況なので必要ない。

○　その他意見交流
・「地元の人」というのは、そこに住んでいる人が地元ではなく、そこへの気持ち、地元愛をもっている人が「地元人」だと感じる。
・親が頑張っている姿が子どもに影響を与えるのだと思う。
・おやじ１００人が集まったら家が建つ。（異種業者が集まるといろ
・おやじたちにどんどん出回ってほしい。防犯にもなる。

地域人財をつなぐキャリア教育（松山市立雄郡小学校）

Ｑ１当日の時間割は？
→４０分、休憩、４０分という時間で区切り、１つ目のブース、移動、２つ目のブースといようにしている。華やかな仕事だけでなく、縁の下で支えるような仕事についての話も聞けるようにしている。
Ｑ２どれほどの業種の方を呼んでいるのか？
→平均して１７業種、合計３０業種。毎回同じではないようにしている。「今、どういきているのか。」という人に出会わせることが大切である。
○　その他意見交流

・生きてきた中で、失敗だろうということを踏まえて話すようにしてる。本音の話ができるようにしている。頑張る人はキャパシティをもっている。
（向井さん）
・毎回、話に行くのを楽しみにしている。子どもたちの学びは、私たちの学びでもある。大人がずっと学ぼうとする姿勢が大切である。（梅木さん）
・生の声、挫折を聞く機会はほとんどなかった。親の立場としても小さいときにもっとそういう話を聞かせることができたらと思う。
・学校外でのフィールドも広げられるといい。

分散会７

司会者：酒井　康秀
記録者：宇都宮　健太
会場責任者：中尾　治司

島根県益田市教育委員会（島根県）

谷上　元織

地方創生をめざした「ライフキャリア」を基盤とした未来の担い手育成！

「ワークキャリア教育」から「ライフキャリア教育」へ。「仕事探し」に偏っていたこれまでのキャリア教育では、「地方都市」は「東京」にはかなわない。しかし、「いかに生きるか」というライフキャリアの視点でキャリア教育を見直すと、今、地方都市でいきいきと生きる人がたくさんいることに気づく。益田市は、平成２７年度「益田市未来を担うひとづくり計画」を策定し、今、益田市でいきいきと生きる「益田人（ますだびと）１００」を認定し、保～高までに意図的、計画的に出会わせる、新しいキャリア教育に着手している。その結果、子どもにかかわる大人が変わり、新たなひとづくりの環が生まれてきています。これが、教育＆子育ての魅力化につながり、「教育による移住」が生まれる。

伊予の伝承文化を学び伝えるリーダー村（愛媛県）

岡本　紋佳
池田　悠人

伊予の伝承文化を学び伝えるリーダー村

現在、地域を大切にし、地域に根ざして活動するリーダーが求められている。愛媛の伝承文化を学び、先人の知恵と自然体験融合した体験活動をし、地域を大切にしようとする心を育むとともに、「子どもむかし生活体験村」を自ら計画し、運営することで地域に根ざして活動しようとするリーダーを養成している。

県内の大学生が日本の伝統文化を理解し、それを継承していこうとする意識をもち、実際にリーダーとしての小学生に向けにプログラム作成から実施までを行っている。

大学生が育ち、小学生も体験を通して伊予の伝承文化を学べる事業である。

上島町教育員会生涯学習課（愛媛県上島町）

中西　智恵

～離島体験事業～こどもミニ島体験事業キャンプ in かみじま～

この事業は、自然の中で活動を通して子どもの体験を重視し、子どもの「育ち」を支援すること、また、町内外の子どもの交流を図り、島の良さを知ってもらうことで、将来の離島振興に生かそうと実施している。このキャンプを始めて、１０年が経過した。毎年夏休み、子どもたちは、島の自然を体験し、自分たちで食材をとり、食事作りをし、一回りたくましくなって帰っていく。地域資源を活用し、子どもの体験、出会いを大切に考え、これまで取り組んできた内容を報告したい。

分散会７では、発表者の詳細（３０分～４０分）→質問（１５分）→全体協議（１０分）×３という感じでした。活発に意見がでていました。

発表者→発
質問者→質①
司会者→司

島根県益田市教育委員会（島根県）

発表者の話（さらに具体的に）

発：「益田市総合戦略」における四つの基本目標である「定住の基盤となるしごとをつくる」、「結婚・出産・子育ての希望をかなえる」、「益田に回帰・流入・定着するひとの流れをつくる」、そして「地域にあるものを活かし、安心して暮らせるまちをつくる」ことに、益田市は、市を挙げて取り組んでいる。そして、持続的な発展をするためには、「ひとづくり」がその成否を分ける。「ひとが育つまち益田」の実現に向けて、未来を担う人、仕事を担う人、そして地域を担う人、それぞれを育成するための取組を個々人のライフステージに従って体系的に網羅した「ひとづくり協働構想」に基づき、組織的に行動している途中である。

～質疑応答～

質①：どのような「ひと」をめざしているのか？

発：将来の益田市を支えるため、自ら可能性を広げることができるひと。二つ目に、しごとを継続発展させるひと。三つ目は、地域のひとと協力し、地域を支える人、地域の資源を生かせるひと。そのために、ライフキャリア教育が大切になる。

質②：ますだびと１００はどんな人が？

発：　益田市で懸命に生きているひと。ひとづくり計画の中で、大人が生き方（仕事）を教えたり、子どもが学んだりする中で、大人も育つ。そのような正の循環でロールモデルになりえるひと。

質③：計画の対象は？

発：誰でも参加できる。益田市全体である。益田市全体の小さい子から大人まで参加できるようにすることが大切である。また、多様な関係機関等や業者と連携・協力を行うことで計画の幅が広がっている。

伊予の伝承文化を学び伝えるリーダー村（愛媛県）

発表者の話（さらに具体的に）

発：ねらいは、地域を大切にし、地域にねざして活動するリーダーが求められている中で愛媛の伝承文化を学び、地域を大切にしようとする心を育むとともに、「子どもむかし生活体験村」を自ら計画し、運営することで、地域に根ざして活動しようとするリーダーを養成することだ。小学校の参加対象は４年生から～６年生となっている。その子たちといろいろな活動に取り組むことだ。また、今年度は、伝承文化の「古民家」を素材に、昨年度の課題を踏まえながら、リーダーの養成を重点テーマに事業を展開した。

右表が活動計画である。

～質疑応答～

質①：活動の成果は？

発：一つ目は、相手の立場に立って、助言の仕方をまなぶこと。二つ目には、企画の運営やマネジメントについての学習が深まったこと。三つ目は、タイムマネジメントの大切さについて理解できたこと。 課題としては、安全管理である。

質②：参加の人数は？

発：大学生１４人、小学生２０人くらいである。毎年、同じような人数である。また、大学の教授や准教授の先生、愛媛大学がバックアップしている。また、愛媛大学ではボランティアについて大学側が様々なものを提供している。学生側は、修学支援システムを利用することで自分がしたいボランティアに参加することができる。画期的なプログラムが愛媛大学に存在する。

質③：魅力は？

発：こどもの成長に携わることができること。参加した大学生が成長すること。毎日、自らふりかえることで自己内省力がつくこと。多様な学生が参加することで横のつながりができること。（教育学部だけでなく、医学部、農学部、法学部、他大学の大学生）また、この体験を通すことで、自信をもって子どもたちと活動できるようになることだ。

上島町教育員会生涯学習課（愛媛県上島町）

発表者の話（さらに具体的に）

発：目的は、自然の中で活動を通して、子どもの体験を重視し、子どもの育ちを支援すること。また町内外の子どもの交流を図り、島のよさを知ってもらうことで､将来の離島振興に生かしていくことである｡今年で１０回目である。全国から参加がある。毎年、夏休みの始まりに、７月２１日～２４日の３泊４日で町内の参加者と町外の参加者３０名程度がそれぞれの班に分かれて活動をする。内容は、集団生活（竹箸つくり、洗濯、食事作り）、海での活動（海水浴、磯遊び、シーカヤック）食材の確保（地引網、魚釣り）、交流・友達作り（オリエンテーリング、はがき交換）

～質疑応答～

質①：成果と課題は？

発：成果は、交流を通して子どもたちが成長することである。課題は、 どこまで大人が補助するのかどこまでを子どもたちがするのか、その線引きがとても難しいことだ。

質②：魅力は？

発：毎年、２年、３年と続けて参加している児童が、「また来たよ。」と言ってくれるのがうれしい。最後のはがき交換が今も続いていることで、この活動がとてもすばらしいと思う。そのため、子どもたちは、いろいろな体験を通じて自分たちで成長する力をもっている。この事業を存続させていきたい。

残りは、名刺交換や雑談になりました。大変、勉強になりました。

分散会８

司会者　中山　佑司
記録者　　松本　宏
会場責任者　中尾　茂樹

島根県益田市教育委員会
益田市版「放課後総合プラン」で教育・子育ての魅力化と移住推進！　　澤江　健
発表のテーマ、～ひとはひとによってひとになる～

放課後児童クラブを中心に改革を進め教育委員会と連携を図るために時間を掛けて具体的な実績作りをすると同時に、保護者視点を新しく入れた益田版の放課後子どもプランを立てた。保護者は子どもたちに益田市に住んで欲しいという願いがある。移住定住のためには、子どものロールモデルとなる輝く大人が必要である。そして、その大人がロールモデルとなることで学ぶ意欲の促進につながる。子どもも大人も学ぶことで、今の子どもが、あのような大人になりたいと思えることが継続の鍵である。どのような仕事をするかではなく、どのように生きるかが大切であり、人とのつながりを絶やさない活動を継続したい。

徳島県那賀川町青年部　　西岡　賦文
那賀川町青年会の復活

復活のために心がけたことは、「人集めをしない」「青年団ブランドを活用する」「自分たちだけで完結しない」「平和への取り組み」である。人集めをしなくてもすむように、子どもたちが集まる子育て支援センターなどに出向いて行った。また、自分たちだけで活動せず、陸上自衛隊や保育士など様々な業種の人が一緒になり活動した。青年団活動をする意義として、人が人とつながる社会を作ることが大切であると感じているからである。今後も、様々な業種や環境の違う人たちが繋がることで地域を活性化していきたい。

惣開公民館（愛媛県新居浜市）　　明日　博美
地域と学校が共に連携しＥＳＤ活動を通して地域力を高め持続可能な共生社会を創造する。

小学校と公民館との交流や地域住民の伝統行事への積極的な参加が減ってきており、関係の希薄化が問題となっていた。そこで、地域を活性化するためには、地域と学校との連携が必要不可欠であるという考えに行き着き、新生チーム惣開、地域協働本部を立ち上げ地域の活性化に努めた。その活動の内容として、①惣開校区総合防災訓練②夕涼み会③夏休みプリンス＆プリンセス講座④そうびらき未来への鉱脈＆観月会⑤地域ふれあいウォーク⑥文化祭＆惣開小音楽会⑦七草粥⑧三世代交流もちつき大会＆独居老人宅訪問などを実践し、学校も地域も公民館もウインウインの関係になるように努めた。

質疑応答

意見感想

益田市版「放課後総合プラン」で教育・子育ての魅力化と移住推進！

Ｑ　キャリア教育は、社会教育の立場からどのように学校教育にアプローチするか。関連性とその成果を教えてもらいたい。

Ａ　市長の施政方針で「人が育つ町益田」を掲げている。人づくり協働本部を立ち上げ、その中で地域の担い手作り部会、未来の担い手作り部会、産業の担い手つくり部会で活動した。

　学校で、～して欲しいから協力してほしいという要請があれば、それに対して協力した。NPOかたりばさんとタッグを組んで、益田に住んでいる若者と子どもたちの出会いの場を作り、どのように生きてきたかを語り合うようにした。

　教育課程に位置つけるのは、これからである。学校側も、したいと考えてもらえるようにこれからの活動をしていく。

Ｑ　体験学習の中で、どうすれば中高生を巻き込んでいけるのか。中学生や高校生に魅力的な活動になるためにはどうすればよいか。また、中学生や高校生の反応はどうだったか。

Ａ　きっかけは困った。中学生が地域の活動に参加していなかった。

　部活単位で参加するのが参加しやすい。部活終わりに来てもらう。学校の後押しが効果的だった。学校が「言って来い。」と言ってもらえるとありがたい。

　運動会のスタッフが一番初め。それが地域の人に認められる場となった。また、保護者の方にもサポーターとして参加してもらう。自分たちがやりたいと思う。中学生が高校生になったときにサポート役になり身近なロールモデルになる。

Ｑ　学校と児童クラブとの関わりはどうなっているか。

Ａ　児童クラブでは、学校では見せない姿がある。色々な角度から見ることができる。学校と児童クラブが連携をする必要がある。支援員の専門性が低いことが問題となっている。学校の生徒指導協議の場に参加している。

Ｑ　支援員さんは、アマチュアであり専門性をどこまで求めるのか。学校の先生がその場に行ってするのはほんのわずかである。学校の先生はそこに行って指導しない。学校側の意識が変わらないといけないと考える。

Ａ　学校の意識が変わっていかないといけないと思う。益田市も学校に他の人たちが入ってきている。学校教育科と社会教育科が連携をしないといけない。学社連携を訴えてきた。学童と学校がもっと連携する必要がある。

郡賀川町青年会の復活

Ｑ　愛南教員は平均４７．９歳、あと少しすれば３３．９になる。青年団の平均年齢はどのくらい。

　青年団は、本当に息を吹き返したと、感じられたときはどんなときなのか。

　自主防災組織をどのように動かしているのか。

Ａ　一番上は４４歳、平均は３３歳で、様々な業種の人が入団している。

最近では、青年団というのが認知されてきている。「那賀川町でもやっているんだね。」、「自分たちの代で終わっていると思っていた。」など、まだ存続していると驚かれたとき。

学校の体育館が避難場所となる。青年団としての関わりはない。しかし、これからは関わりをもたなければならないと考えている。

阪神淡路大震災は、直下型であったが、北淡町では大きな被害が無かった。地域が密着していたから、どこに誰が居るかが分かり、すぐに助けることができた。そこで、北淡町で、できたことを自分の町でもできないかを考えている。

Ｑ　青年団に参加している。若い世代がいなくなっている。魅力を感じることができる取組は何かあるか。

Ａ　昔は、お酒が飲めるから・・・しかし、今は、その人の興味で活躍できる場を設定することで魅力を感じてもらう。来るもの拒まず、去るもの追わず。

Ｑ　みなさんに質問、青年団活動しているか。

Ａ　野村町は、青年団の活動が活発です。自分たちで活動を積極的にしている。周りとの関わりの中で友達や恋人ができている。地域の活性化にも繋がっている。

新居浜では、太鼓があり、その太鼓が魅力的で入る人がいる。そこに入ることで太鼓に触ることができる。

<u>地域と学校が共に連携しＥＳＤ活動を通して地域力を高め持続可能な共生社会を創造する。</u>

Ｑ　新居浜市の放課後に学習についてどのような形態で行われているのか。

Ａ　児童クラブが置いていかれている。学び塾は学校教育で行っている。新居浜市全体が充実しているとはまだ言えない。

Ｑ　公民館の人員は何人か。

Ａ　４人。

Ｑ　地域の掘り起こしはいつからやったのか。

Ａ　地域を動かす力のある人はたくさんいたが、先人を切ってする人がいなかった。また、連合自治会長のサポートがあった。やりたいという気持ちはあったが、きっかけが無かった。

Ｑ　館長さんの反対は、無かったのか

Ａ　無かった。館長は一緒にしてくれた。また、校長も一緒になってやってくれた。

Ｑ　児童クラブ、放課後子ども教室、学び塾は新居浜全体でやっているのか。

Ａ　準備ができたところから順次行っている。

Ｑ　コミュニティースクールという看板を掛ける必要性は。

Ａ　制度となったため。看板をつけコミュニティースクールを設定することで、だれが来てもその体制を作れる。また、コミュニティースクールになると、加配が付くという利点がある。

分散会９

司会者　井上　裕也
記録者　森本　一豊
会場責任者　灘岡　雅人

静岡県牧之原市

宮崎　真菜　氏

平成２８年度地域リーダー育成プロジェクト

「高校、大学、地域が連携協働し、地域に対して誇りと愛着をもち、地域の課題解決に貢献する人材を育成すること」が目的である。市内にある２つの県立高校（榛原高校、相良高校）の生徒を対象として、大学生や大人を交えての「学び合いの場」を５回実施し、合計１８５人の生徒が参加した。この場の企画と運営は、市民ファシリテーターと各高校の代表生徒で組織した「学び合いの場デザイン会議」で行った。今回のプログラムに参加した生徒からは、「地域をもっと好きになれた」「地元に残っていこうと思った」という声が挙がった。

愛媛県松山市

栗原　葉子　氏
三村　由美子　氏

理科実験工作教室

学校で習った理科の知識が生活の中で生かされていることを知ってほしくて平成１９年から始まった。年間５回、土曜日に実施している。その知識を活用した工作作り、実験等を行っている。教えているのは、普通のおばちゃんたちである。教員免許も持っていない。毎回どんなことをどういう風に工夫して子どもたちにトライさせていくかを井戸端会議して決めている。それが、スタッフの楽しみにもなっている。

愛媛県内子町

沼井　高志　氏
丸橋　勝　氏

天神親ＪＩの会

「保護者同士がもっと仲良くなれば、子ども同士ももっと仲良くなるはず。」そして、とにかく「子どもたちと一緒に遊ぼう。」そんな勢いで「おやじの会親子キャンプ」が始まった。来られる者が集まって、来られる者でできることをすればいい。と、そんな思いつきで、平成２７年に始まった。今年も、８月２０日～２１日、五十崎自治センターを本拠地に、川で泳ぎ、みんなでご飯を作った。２１日の朝は、全員で天神小学校のＰＴＡ奉仕作業に参加する。一人のおやじの思いつきが仲間を呼び、地域の輪を広げ、結びつきを強くている。

質疑応答

平成２８年度地域リーダー育成プロジェクト

Ｑ１　市民の人がファシリテーターになるのは、どういうきっかけか？

→一緒にやろうと声をかけ、人づてに広がっていく。この人なら、高校生の話を聞いてくれる人が集まる。

Ｑ２　予算はどれくらいか？どこから出るのか？

→文部科学省からの「対話による首長部局と学校との協働による地域リーダー育成事業」の企画による。予算は２・３００万円ぐらい。

Ｑ３　１年だけの事業か？

→昨年度は自分たちの事業で行った。

Ｑ４　参加者は希望か？

→希望である。先生が誘うこともある。

Ｑ５　参加者を高校生にしたのは？

→小中学生は、教育委員会の組織である。高校は組織がちがって県であるのでつながりやすい。先生たちともつながりやすい。

感想･意見

→すばらしい取組なので、これからも続けるようにしてほしい。

→県外に行ってしまう子どもが多いので、小中学生にも見せたら、地域に残る人が増えてくるのかと思う。

→地元に残っても何も無いから帰って来なくてもいいと思っている保護者もいる。子どもたちに地元のよさを伝える場があるのはいい。

→尾道では、夏のイベントを大学生が中心となって活動している。いろいろな人の話を聞いてディスカッションすることを大切にしている。しかし、地元出身の大学生が残念ながらいない。

生石子どもいきいき教室

Ｑ１　スタッフ４名はどういう人？

→主婦である。年齢が上がるにつれて、働きながら行っている。

Ｑ２　きっかけは？

→ＰＴＡの役員でつながりがあった。

　理科は先生、工作はスタッフが行っている。

Ｑ３　公民館との関わりは？

→実行委員長は、館長。文書等の印刷等は公民館でしている。

○　高校生との交流もあるが、高校生も学ぶことが多く、今後も継続して欲しいと言われている。

○　後継者を育てるのが、一番の課題である。

○　平日は、退職された先生方に来て、安心して教えていただけている。

感想・意見

→放課後子ども教室で、自分たち主体でアイデアを出し、実行しているのがすごい。子どもたちの目の輝きがとてもすばらしい。
→理科離れをしている中で、アイデアを出し合ってしているのがすばらしい。
→お母さん目線で見てアイデアを出しているのがすばらしい。子どもクラブの可能性を見出せた。

天神親ＪＩの会

Ｑ１　準備期間は？
→５年生２４名。保護者７～８名。準備期間はほとんど無し。その日に買い出しなどするので半日程度。
Ｑ２　元気な５年生をどうまとめたのか？
→親も一緒に楽しもうとすると、雰囲気が子どもにも伝わる。言うこともきちんと聞くようになる。
Ｑ３　きまりごとは？
→特に無し。
Ｑ４　他の学年から言われたら？
→他の学年は知らない。親は知っている人はいるが、先頭たってやろうとする人はいない。
Ｑ５　ＰＴＡとの関連は？
→関連は無し。文書は個人名で出す。施設を利用する時に、ＰＴＡを使う。
Ｑ６　この会をする時の母親の反応は？
→この２年間特に無し。
Ｑ７　中学生になってもするのか？
→中学生になると部活動があるので難しいが、おやじのつながりは続く。
Ｑ８　他の学年のおやじから入りたいという声は？
→いいなという声はいただいた。
→なかなか後継者が育たないのが課題。
感想･意見
→このきっかけを大切にしてほしい。若いお父さんを取り込んで、違う学年でも引き継いでもらう。
→規約を作って、全校に配って、組織作りをして総会をしてはどうか。
→広げるのは難しい。地道にこつこつと広げていく。
→大人が地域の子どもを育てるというのがなくなりつつあるので、社会教育が難しくなってきている。考えなければならない時期に来ている。
→考えずに動くことも大切である。

最後に

　後継者不足が課題である。協力し合ってやっていくことが大切になる。取り組む人が楽しむことが大切である。そういう姿を見せなければ、次世代がついてこない。若い人が楽しめるところを作っていかなければならない。

分散会 10

司会者　渡辺　司
記録者　松田　裕樹
会場責任者　小池　源規

愛媛県新居浜市

放課後子ども教室「はぎっ子テン」

「はぎっ子テン」の活動は、心豊かでたくましい子どもたちを社会全体で育む目的で、スポーツ（カローリング、吹き矢、ラダーゲッター）や伝統文化など様々な体験活動（サツマイモ植え、そうめん流しなど）や地域住民との交流活動などを行っている。その経験を通して、子どもたち自らが学び、考え、生きる力を身に付けること、そして、地域・学校・家庭が連携して、ふれあいが深まることを願い活動している。活動を通して、子どもたちのコミュニケーション能力の向上や登下校時だけでなく、出会えば積極的に挨拶できるようになってきた。

竹内　宏江氏

愛媛県宇和島市

愛護会活動の取り組み

高光校区児童愛護会連合会は、愛媛県下に愛護班が産声を上げた昭和３６年７月に発足し、現在は１０の単位愛護会の連合体で、単位愛護会では運営できない大きな事業を協働で実施してきた。現会員数は４７人で、高光小学校での加入率は９８％に達している。活動としては、市ソフト・ミニバス大会に向けて子どもたちを指導したり、キャンプ、秋祭り、もちつき大会を運営したり、年間を通じて子どもたちの健全育成に寄与している。さらに、協力事業として、地区の防犯パレードや独居老人訪問、スポーツ大会や運動会等に関係諸団体と連携して積極的に参加している。

吉澤　勇人　氏

広島県大竹市

「公民館をイメージチェンジ！」～学びのカフェ物語～

老朽化した玖波公民館は事業もマンネリ化し、新規の来館者が少ない状態だった。そこで「公民館のイメージチェンジ」を図るため自主事業の改革を試みた。５年前から「おしゃれな学び空間」として「学びカフェ」を創造し、自由に語り合うカフェタイムを設けるなど、参加者の交流を図り、住民同士の絆を深め、横の繋がりを構築していった。講座内容にも工夫を凝らし、生活に密着したタイムリーな内容、参加したくなるような興味深いテーマや魅力的な講師など、大幅な刷新を図ることで来館者が増えていくことになった。その結果、働く人や若者など、今ま

河内　ひとみ　氏

質疑応答

放課後子ども教室「はぎっ子テン」

Ｑ、子どもの指導について（悪いことをした際の対応）

Ａ、　学校の先生ではないから、地域の住民として子どもをしっかり指導する必要がある。遠慮する必要はない。悪いことをしたら、大人の責任としてしっかり叱らないといけない。時代が変わって来ている。悪い事をしたときに、どうして叱るのかをきちんと伝える。関わる大人が愛情をもって子どもたちに接していくことが大事。最初に、ルールをきちんと示しておくことが大事。子どもを指導する際に、メリハリをもって指導する。叱る線引きが難しいことがある。公民館では、チームとして役割分担することはある。いつも叱ってしまうことがあるので・・・。

Ｑ、カリキュラムのマンネリ化について

Ａ、同じボランティアの人で行っているとそうなってしまう。様々な場所で行う研修会に積極的に参加してスキルアップすることが大事。（アドラー心理学やアンガーマネージメントなど）ボランティアの高齢化も要因の一つ。３０代や４０代の子育て世代は、自分たちのことで精一杯でなかなか参加しづらい。集まっている子どもたちで話し合い、どんなことをしてみたいのか話し合うというのも一つの方法でもある。（異年齢集団で話し合うこと）自分たちで話し合うことで、達成感を感じることもある。

Ｑ、放課後子ども教室と放課後児童クラブとの関係について

Ａ、愛護班の中から放課後子ども教室のお手伝いをお願いしている状態。しかし、子育ての現役世代はなかなか難しい。放課後子ども教室と放課後児童クラブの連携の流れがある。

愛護会活動の取り組み

Ｑ、愛護会での活動について

Ａ、愛護会に参加してみて、初めは行う活動が多いなと感じたが、それによって地域でのつながりができていると感じる。地域の人は、活動があるのが当たり前でみんなが参加してくれる。公民館が主体ではあるが、学校と地域が非常に近い距離にある。

Ｑ、キャンプ活動について

Ａ、本来は本格的なキャンプに行ってみたいと思うが、日程的にも難しい。本格的なキャンプは各家族で行けばいいが、愛護班の活動としてはキャンプに行ってみたいというきっかけ作りになってくれたらと思う。

【感想】

近年は、いじめの問題の際に「地域全体で守っていきたい」などというコメントがあるが、高光校区というところは、地域の教育力がしっかりしている。今後も継続していってほしいと感じる。

「公民館をイメージチェンジ！」～学びのカフェ物語～

Ｑ、　フェイスブックやブログをすることへの抵抗はなかったのか。

Ａ、　最初は、なかなか難しかった。特に学校関係は保守的で難しかった。しかし、事業を続けていくことで周囲の理解を得られるようになった。また、掲載する際には保護者の了承を得たり、個人が特定されないようにしたり、十分配慮している。

Ｑ、　地域の学校の在校生の数は。

Ａ、　中学校で９０人程度、小学校はもう少し少ない。

Ｑ、　学びカフェをすることにギャップはなかったのか。

Ａ、　地域の理解が、常に得られるわけではなかったので、最初はギャップがあったので難しかった。

Ｑ、　予算をどのように工面したのか。

Ａ、　公民館としての費用は少ない。予算が少ないからこそ連携ができる（信用金庫、四国銀行など）助成金が得られるように努力をした。

Ｑ、　地域としての課題の見極め（１章から２章への）

Ａ、　見極めは難しかったが、いつまでもおなじことを続けるわけにもいかないから。地域の人の意識が変わったかどうかを見極めて、次のステージに進めていっている。

Ｑ、　毎月の催し物が多いと思うがＰＲ方法は。

Ａ、　紙媒体がメイン。そこから、様々な情報媒体を使う。催し物の種類によって、顔ぶれが違っている。

Ｑ、　この事業の最終的な目的は。

Ａ、　若者が地域に根付いてくれること。地域の活性化。また今後は、他の地域との交流や異文化にふれる国際交流もしてみたい。

Ｑ、　河内さんのエネルギー源は？

Ａ、　人と人との繋がり。

【最後に】

どの発表も素晴らしかった。そして、発表を聞き、改めて地域のつながりが大切だということが分かった。また、こういった機会を大切にして、人と人とのつながりを大切にしてほしい。

分散会 11

司会者　　矢儀田　雅幸
記録者　　井門　加奈恵
会場責任者　溝渕　　雅子

佐賀県佐賀市立神野公民館

池田　明氏

高校生 Teacher 講座

「さまざまな体験をすることで、子どもたちは変わる。」をテーマに高校生が先生となって、部活動で鍛えた技術や知識を小学生に教える事業である。高校生は教えることの難しさを学び、小学生はふれあいの中で高校生の技術や知識の素晴らしさを学んでもらうとともに、いろいろなことに興味をもち「頑張ればいつかはできる！」と夢を持つことを目的としている。平成 16 年度から取り組み、毎年約 400 名（小学生、高校生、地域サポーター）が書道や音楽、スポーツなどの講座に参加しているが、今では小学生の時に参加した子どもが高校生になって教える側で参加してくれるようになっている。また、その他の地域活動にも高校生が積極的に参加してくれることが増えてきている。

北海道札幌おやじネットワーク

森田　圭三氏

豊かな感性と輝く希望を持った子どもを育成できるコミュニティーづくり

地域コミュニティーが機能しづらくなっている中、より広く地域の中で、自由に、永続的に取り組んでいける活動にするため、志を同じくする仲間が集う“場”をつくり、互いの経験交流や学び合うこと、支え合うことなどのサポート機能が市民活動・市民事業の充実のためには必要である。こういった思いを持つ各地のおやじ仲間が集い、共に育ち合うこと、そのために必要な機能を自ら創り出すこと、そしてそれを多くの仲間と分かち合うことを進め、市民の自発的な社会活動を推進し、豊かな感性と輝く希望を持った子どもを育成できるコミュニティーづくりを実現することを目的に「札幌おやじネットワーク」を設立した。

活動は、全国おやじサミット、全国こども雪山探検隊、さっぽろおやじスノーフェスⅢ『真冬の逃走中』、おやじの会夏祭り、おやじ級グルメ No.1 決定戦！OG-1 グランプリの開催など、多岐にわたっている。

無人島実行委員会（愛媛県）

松下　圭介氏　　大倉　徳壽氏

御五神島・無人島体験事業

国立大洲青少年自然の家や宇和島市沖の無人島「御五神島」において、7 月 31 日から 8 月 9 日までの 9 泊 10 日間、県内の小中学生 42 名が参加し、無人島体験事業を実施した。~~ている~~。子どもたちが、無人島の中で「不便」「不足」「不自由」の制約された環境の中、自ら創意工夫し、協力し合いながら自然体験活動・生活体験活動に取り組むことにより、自立心や協調性などの社会性を育むとともに、困難なことに直面しても克服できる柔軟で強い精神力を養うことを目的としている。

質疑応答

佐賀県佐賀市立神野公民館

Q1　参加する高校生の割合は？

→両高校約 1400 人中 150 人~~、~~で約1割程度。

Q2　どれくらいの頻度で行っているのか。

→毎年、~~部活動の経験を生かしている。~~夏休み中に9～10講座を実施している。~~1回のみ。~~時間は2～2時間半程度で行っている。

Q3　地域サポーターの具体的な活動は？

→熱中症予防などの健康面での配慮、公民館から高校までのバス移動中（特に路線バス）の安全面での配慮やアンケートの配付・回収など、当日の運営に協力いただいている。~~大阪教育大学附属池田小学校の事件後、校区内外の見回りをしたり、見守りステッカー貼って見回りをしたりしている。~~

書式変更: インデント : ぶら下げインデント : 2 字, 左 0 字, 最初の行 : -2 字

Q4　講座の割り振りはどのようにやっているのか？

→小学生に第1～3希望まで書いてもらっているが、~~くようにしているが、~~調整はなかなか難しい。

講座内容によっては、学年を限定している。（難しい内容は高学年のみ等）

人気が高いのは、サッカー、新体操、料理、パソコンなどである。~~は人気が高く定員50名としており、一番多い。~~

Q5　公民館の活動で小学校を使っているが、公民館は使わないのか？

→平成 28 年度は、~~ジュニア育成のため、~~フェンシングは公民館を使ってやっている。

Q6　佐賀市で公民館はいくつあるのか？

→原則、各小学校区に市立公民館が31館~~個の公民館が~~ある。

Q7　1日でどうやって複数の活動を行っているのか？小学校へのお知らせの時期等は？けがをしたときの保険は？

→平成 27 年度は 6 日かけて 10 講座を実施した。職員 3 人で分担して、1 日に複数講座行うこともある。~~それぞれの活動によって日時が異なり、それぞれで何日の何時からと決めている。~~

7 月初旬に全校児童・保護者あてのチラシを配布。~~までには知らせに行っている。5 月の連休明けに高校にお願いに行っている。~~

公民館の総合補償~~保障~~制度を使っている。~~市からの補助金を増やしてもらい、保険内容をいいも~~

~~のにしている。~~

Q8　高校生への指導は？

→公民館はほとんどしていない。高校の先輩から後輩へ受け継がれたり、顧問の先生が講座終了後に問題点を生徒に考えさせ、指導されている部もある。~~地域サポーターの方々が、時々アドバイスをする程度。~~

札幌おやじネットワーク

Q1　やってみたいと思う企画がたくさんあるが、企画等会はどうやってやっているのか？

→月に1回定例会を開いている。定例会の後に懇親会を行う。何かあれば、そのたびに顔を合わせている。「否定はしない。」「とりあえずやってみようよ！」のスタンスでやっている。それぞれのお父さんの仕事や特性を生かしている。子どもと一緒にやると、親もがんばれる。

Q2　おやじの会への入り方は？

→小学校の PTA にある。校区などで聞いてもらうとよい。おやじの会ネットワークに入っていない単独のおやじの会もある。小学校の教員も入っている。

Q3　活動をしていて最近うれしかったことは？

→一つ一つの活動に力を入れている。OG-1（おやじ級グルメNO.1 決定戦）の活動にたくさんの人が来てくれたのはうれしかった。子どもに「またやってね。」「ありがとう。」と言われると本当にうれしい。

御五神島無人島体験事業

Q1　長い期間の中で子どもとの関わり方は？

→体調管理や心のケアの面では、カウンセラーや指導者の教員など全体で関わっている。各班の指導者が子どもたちと生活をともにし、課題が出れば解決方法を話し合っている。~~ホームシックの子がいたが、その子への関わり方など班のほかの子どもたちと話し合ったり、カウンセラーやベテランの教員など全体で関わったりした。~~

Q2　指導者をどうやって集めているのか？教員は勤務が関わっているが、どうやっているのか。

→5月頃に教員へ依頼する。立候補してくれる人もいる。たくさんの方々の協力があって成り立っている。教員は出張扱いとなり、旅費等は実行委員会が負担する。

Q3　子どもの行事（水泳記録会等）と重なることもあるが、~~は~~どうしているのか？

→7月下旬から 8 月上旬が比較的行事が重ならないので、この時期に計画している。参加者が予定などを考慮できるように募集チラシを 5 月に配布し、6 月中旬までに応募はがきが希望

者から届くようにしている。~~7月末～8 月頭が一番重ならない。6月中旬までに応募はがきが子どもに届くようにしている。（予定など考慮できるように）~~

Q4　天候が荒れた時はどうするのか？

→台風などで船が出ないときや、天候の大荒れが予想されるときは、計画の変更や撤収・中止の決断を早くするように心掛けている。入島前が悪天候の場合は、港近くの下灘公民館に泊まる。入島してからは、Web上で~~スマホで~~雨雲をチェックし、悪天候が予想される場合は、近くの有人島の~~する。入島前に台風などがきた場合は、下灘公民館に泊まる。入島してからは、~~竹ケ島に避難するようにしている。また、事前に行う指導者の現地研修で避難ルートを確認し、~~台風などで船が出ないときは中止したり、避難ルート等事前研修でチェックしたりして、~~安全確保には細心の注意を払っている。

Q5　予算は？

→参加費用は25000円。その他、後援団体や企業・各団体からの支援・援助がある。合計400万円程度、費用がかかっている。

分散会 12

司会者　　中本　克也
記録者　　幸島　恭輔
会場責任者　谷川　玲子

島根県雲南市教育委員会

「知恵と勇気と誇りをもったたくましい雲南の子ども」をめざして

錦織　慎司　氏

雲南市では、「ふるさとを愛し　心豊かでたくましく　未来を切り拓く雲南市の人づくり」という教育基本目標を掲げている。その実現のために、学校・地域・家庭・行政・の連携・協働を推進する多重コーディネート制度や、雲南市で共通した「キャリア教育（生き方教育）推進プログラム」を取り入れ、地域総がかりで子どもの学びを支援する教育環境の実現を図っている。平成 22 年に公民館から交流センターへ移行し小規模で多機能な自治組織による活動を行うことで、地域の振興発展を図り、成果を挙げてきた。しかし、学びの循環による次世代の育成が行われず、継続性に大きな不安が残るという課題があり、地域教育力の再興・向上を目指した取組を行っている。

町見郷土館

佐田岬みつけ隊

高嶋　賢二　氏

伊方町の町立博物館である町見郷土館では、「佐田岬みつけ隊」という会員約 60 名の市民中心のサポーター組織があり、学習支援・企画展示・収集保存・調査研究の４つの柱で活動をしている。民族資料の整理をしたり、２月には御殿雛の飾り付けをしたりしている。また、レコードの資料整理をして、できあがったリストでリクエスト演奏を行う蓄音器ライブなどにも取り組んできた。これらの活動報告を、「みつけ隊通信」として発行している。展覧会としての機能だけでなく、調査研究や保存管理といったミュージアム施設の重要な役割を市民協働で行っている。

庄内公民館

公民館と愛護班の連携事業

石原　善久　氏

庄内公民館では、８月には「しょうない夏まつり」、９月には「敬老会」、「ふれあい大運動会」、11 月には「ふれあい文化祭」など、様々な活動に取り組んでいる。各行事を通して、愛護班（保護者）が地域の子どもを健全に育成している。地区によっては人口減少が顕著で、地区割りの役員選出やノウハウの継続が困難になってきた等の課題があるが、今後も地域資源を活用したり、青年層の地域活動への参加を促すような取組をしたりして、三世代型生活と観光の拠点として地域活性化に努めていきたい。

質疑応答

島根県雲南市教育委員会

Q1 行政からおりてくると受けた側の活動は受け身になってしまう。受け入れてほしい側へどのように訴えかけてきたのか。

→行政は自分で声をかけるにも関わらず受身になってしまう。こちらから「どうしたらいいですか？」と投げかけて地域の声を聞く。地域での円卓会議に参加し、介入していく。地域の人々が活躍できる(高齢者が客にならない)ことを念頭に置いた取組を実施してきた。地域住民総がかりで取り組めるように心掛けてきた。

Q2 行政の中の教育委員会の立ち位置は？

→公民館を通した取組から学校と一緒にやっていくスタンスになった。

Q3 交流センターになって、どのような課題が見えてきたか？

→小規模では学校の統合論がでてくる。地域は統合したくないので、統合ありきではなく、地域の魅力をアピールして地域に人が来てくれるよう考えた。

また、公民館はカルチャースクールが増えすぎているといわれる。そこでできたつながりを地域の活性に生かしていく。人を育てる公民館があるのはすばらしいことで、活動を通して地域や住民がどう変わっていたのかを公民館は語れるようにならないといけない。

Q4 コーディネーターの選出、期間はどのようにしているのか？

→地域コーディネーターは、地域住民の中から選出する。長ければ１０年、短くて２、３年務める。教育支援コーディネーターは若手の市の職員で人事異動がある。２、３年務める。フットワークを軽くして、学校から見ても受け入れやすいようにしている。教育委員会にまとめ役の人間がいる。

Q5 学校間連携がうまくいっていない現実がある。そのコーディネーターが一週間でだいたいどんな仕事をしているのか。

→職員会への参加する。週に一回は小学校へ行く。火曜日は各配置のコーディネーターの会議を行い、ふるさと学習について話し合う。県職員の教諭ができない地域の連携や取組を教員と連携して行う。

Q6 自治体間の取組、県全体での取組があれば教えていただきたい。

→自分の自治体だけで完結していることが多いのが現状。島根県には派遣教育派遣制度が残っているので、その活用がこれから必要。企業の力は行政がもっていない知識をもっているのでその力も借りたい。

町見郷土館

Q1 地域住民の力を借りて進めているのが大変すばらしい。地域の子どもも活動に参加しているのか。
→交通手段の問題などもあり、手が回らなくて子どもには対応できていない。
Q2 館内の展示でお宝は
→この地域は特色的な暮らしがあり、資料は民族資料が中心。
Q3 どのような組織で成り立っているのか。
→保険代の実費が 800 円で、博物館に関わりたい町民が関わっている。
Q4 活動を広げていくために、NPO など、組織としてお金を集める等して活動を広げていくことも考えられる。博物館を通して、街歩きをして自分たちの町を見直す取組をすることなども考えられる。行政の協力を得ることなどは考えていないのか。
→今まで知られていなかったことを調べていきたいという思いはある。博物館の有用性を分かっていただきたい。予算がかかるものは話が進んでいないのが現状。隊員の満足度と地域について調べることの両輪をバランスよく考えていきたい。

庄内公民館

Q1 地域に密着した活動が多い。公私の区別をどのようにしているか。
→家庭が後回しになってしまっているのが現状。
Q2 婚活イベントのお化け屋敷について詳しく教えていただきたい。
→公民館でできることを考えたところ、オリエンテーリングや料理教室も挙がったがお化け屋敷をやろうということになった。人集めには苦労をしたが、男女のバランスもよく開催することができた。
Q3 高齢化が進むと子どもとの年齢差も広がっていくが課題や工夫はあるのか。
→老人クラブと子どもは、昔の遊び、しめ縄づくり、花植えなどで活動している。参加できる老人が減ってきていることや、決まった内容の事業を毎年新鮮に取り組めるようにしていくのが課題だと考えている。保護者層が公民館に来ていただけると活気がでる。
Q4 住民自治組織は活動しているのか。
→自治会の体制がとれている地域もあるが、高齢者が役員となる地域は行政主導の活動となる。

司　会　者　　野々下　博子
記　録　者　　入澤　勝利
会場責任者　　柳　瀬　　剛

分散会 13

飯山中学校区学校支援地域本部（香川県丸亀市）

学校支援ボランティア促進事業、等

平成 17 年３月に近隣１市２町が合併し、新生「丸亀市」が誕生。統合における諸問題を解決するために、学校・家庭・地域を結ぶネットワークを作り、みんなで子どもの育ちを支えていこうと、飯山中学校区学校支援地域本部が中心となり様々な取組を行ってきた。学校支援ボランティア事業として、ピンクバッジの配布や、新一年生補助ボランティア、ミシン学習補助など、現場のニーズを汲み取りながら活動を行ってきた。また、丸亀市飯山学校群小中一貫教育推進事業（飯山町での講演会の開催など）をはじめ、放課後子ども教室、地域のチカラ創出事業、家庭・地域教育力再生事業「地域で共育」など、人と人とのつながりを大切にしながら、学校・家庭・地域の架け橋となる活動を続けてきた。

青井　静　氏

徳井　恵美子　氏

松山東雲女子大学・短期大学「しのモン応援隊」（愛媛県松山市）

熊本地震復興支援ボランティア学習

今年４月に発生した熊本地震。「被災地のために何かしたい」という学生によって「しのモン応援隊」が立ち上がった。女子大学ならではの「女性としての目線」を大切に、保育・幼児教育、心理福祉、現代ビジネスを学ぶ学生たちが自分たちの専門を生かし、学内バザーや熊本被災地訪問（NPO 今治センターガイド　学生２名　引率１名　一泊二日）等のボランティア学習を展開した。どんな支援活動を行うのか、自分たちに何ができるか、「提案」「問いかけ」はするが、選択・意思決定は学生に委ねてきた。また、成果を人数でとらえず、後方支援のためのネットワーク作りに努め、さりげない「調整役」として見守ってきた。活動を行っていく中で、学生自身が自分の意見や持ち味を積極的に出すようになったり、自分の将来とつなげて考え、行動するようになったりするなど大きな成長があった。

柴崎　あい　氏

愛媛県立宇和島水産高等学校（愛媛県宇和島市）

地域人材を活用した土曜教育推進事業

愛媛県の「地域人材を活用した土曜教育推進事業」を活用し、生徒の個性を伸ばす教育として社会で活躍されている方を講師として招いている。環境保全と魚食普及の二つの大きな柱のもと、森・里・海関連事業として、土曜教育推進員に漁業関係者、地域食材をテーマにした生産者などを講師として呼び、講演や体験学習を行ってきた。地域の水産業に貢献できる人材育成や、地場産業である真珠養殖業・魚類養殖業の活性化、地域貢献活動、水産増殖分野で人間性の育成を通し、地域の水産業に貢献できるよう様々な取組を行ってきた。今後も人と人とのつながりを大切にし、志の高い地域の方と WINWIN の関係が築けるよう、生徒と共に歩んでいきたい。

喜多川　浩史氏

質疑応答

学校支援ボランティア促進事業、等

Ｑ１　地域と学校をつなげる役割として、おやじの会などはあるか？

→　多忙な人が多く、生活環境も各家庭によって違う。貧富の差もあり、家庭環境が複雑で、連帯感をもちにくい土壌がある。そのためおやじの会などはないが、おじいちゃん会、グランパグランマの会はある。

Ｑ２　いじめ防止のバッジ（ピンクバッジ）を初めて知った。この効果は？

→　つけていることで何かしなければならないという意識が芽生えている。決して強制をしているわけではない。自分はいじめをしない、見逃さないという宣言、意思表示の意味でつけている。

Ｑ３　どれくらいの割合でつけているのか。

→　ほぼつけている。もちろんつけていない子もいたり、外す子もいたりするが、強制ではない。外す子は何かしらのサインとみることもある。市内でも広がっている。

（フロアより）自由意思でやっているのがとてもいい。

Ｑ４　（参加者の）二極化を打破する策は？

→　人が人を呼ぶ考えで行動している。つながりを大切にしている。チラシ１枚配ったところで効果は薄い。直接、声を掛け、断られても声を掛け続けるようしている。魅力的なイベントも来てみないと分からない。いろんなイベントを考えているので、声を掛け続ける人を見付けなければならない。

また、コミモグ（コミュニティモグモグの略）を行っている。隔月で７～９時に行っている。飲み食いするものを自分で一品持ち込んで雑談することがあり、そんなつながりを大切にしている。

Ｑ５　コミュニティスクールの方向性は？

→　個人的な意見になるが、地域と学校との円滑な運営の模索もあり、近々には難しいと考えている。共通理解という面で難しい。自分自身が地域本部のコーディネータをしているのでつなげやすい立場ではある。

熊本地震復興支援ボランティア学習

Ｑ１　在学生の構成はどうなっているのか。地元生の割合は？

→　具体的に何割かは分からない。ほぼ実家生である。

Ｑ２　実家生が多いと聞いたが、それは今後の課題になるのではないかと感じた。一人暮らしの学生さんなどを、どう支援していくかが課題かなと思った。大学側が支援してくれるとありがたい。自分の大学（広島経済大学）だったら、興動館というところがある。職員に相談すると、様々なことを実現できる環境がある。大学側との連携が大切だと思った。

→　一人暮らしというのは一つのキーワードだと感じる。熊本の被災者の話でも、一人暮らしの学生さんを、大家さんがしっかり把握していたという話を聞いた。コミュニティがしっかりしていた。一方、本大学の学生はアパートの管理会社の人しか知らないという現状がある。どのようにつながっているかというのは、有事の際には大きな課題になってくると思う。また、学生さんを応援できる体制はまだできていない。ボランティアセンターはあるが、今回のように学生の意見を取り入れて活動まではできていない。今回の活動を基に、いい前例を作っていきたい。

Ｑ３　大型スーパーで募金活動をしていた小学生を見かけた。「募金をお願いします。」と大きな声で連呼する子どもたちと、そこを避けて通る大人の姿を見て、募金活動の危うさを感じた。子どもたちの一生懸命な姿は、周囲に感動を与える

かもしれない。しかし、もしそれが至る所で行われ、そこで募金しない人が冷たい人のように思われる雰囲気を醸し出すのは考えものである。多くの団体が様々な方法で募金活動やボランティア活動を行っていたが、被災者の思いを汲み取ることが必要。被災当時、発達障害のある子どもをもつ親や認知症の親をもつ人は、泣く泣く車で夜を明かした人もいる。しのモンは目的意識をしっかりもって活動できていた。学びの中で、ボランティアをするのが大事だと感じた。

→　終わらない災害にボランティアを続けることに対して、徒労感はある。しかし、募金活動などを通して、そこに立つことに意味があると伝えている。何かのアナウンスをしないと、傷つく思いを見過ごしてしまうことになる。避難所の運営についても、その支援についても、考えなければならない。

地域人材を活用した土曜教育推進事業

Q１　水産高には何人の生徒がいて、この活動にはどれくらいの割合で参加をしているのか？

→　公募をかけて行っている。部活動だけでなく、土曜を有効活用してほしいという思いがある。一回あたり 10 名の参加。４～５回行ってきた。重複もあるが４、50 名は参加している。

Q２　教職員の方の参加は？

→　水産の専門科目の者や、いろいろな職員が関わっている。

Q３　地域の人材の確保の仕方は？

→　水産高教諭として、地域の方に声を掛け行っている。日頃の人間関係や体験学習先を含めて声を掛けさせてもらっている。

Q４　水産高校の卒業者の就職先は？地域に受け皿はあるか？

→　水産業に従事する生徒は、多い。地域の受け皿もあるが、生徒のニーズもあるので、必ずしも地元に残るわけではない。

Q５　最近はあきらめやすかったり、努力が続かなかったりする子が多いが、生徒の実態は？

→　種をまいて花が咲くにはすごく時間がかかる。今後も花が咲くように地域の方の協力も得て、活動を行ってきたい。

Q６　高校生と小学生のつながりのきっかけは？

→　生徒会に似た組織（水産クラブ）がある。１６～７年前から生徒たち自身の意見で小学生に伝えたいという意見が出てきた。現在では、異世代に伝えるという思いが当たり前になってきた。

Q７　今後のイベントでも販売なども行っていくのか。補助事業の予算的にはどうか？今後の活動の展望、方向性を知りたい。

→　今までも手弁当で行ってきた。今年で事業は終わる。しかしなんらかの形で継続していきたい。何かあればイベントなどに出向くので、声掛けいただければ幸い。

Q８　魚食普及で出張依頼は可能か？

→　移動の問題だけで可能である。

Q９　これまでにできなかった活動は？　またその理由は？

→　日程調整が難しく大変だったことがたくさんある。

Q10　フィッシュガールの成立については？

→　養殖している魚を生徒がさばくことで PR をしている。

分散会１４

司会者　西川　浩司
記録者　二宮　啓
会場責任者　山口　定伸

埼玉県春日部市中央公民館

山下　剛史　氏

公民館を利用するサークルや地域の方が「地域の子どもは地域で育てる」を目的に活動をしている。武里地区公民館では、昨年は約１７０回事業を実施した。特に、防災対策事業に力を入れ公民館と地域の方とのつながりができた。その後、声掛けにより子どもの事業への協力体制もでき長期計画を立て、定期的に事業を実施することができるようになった。子どもの意見を聞き、実施した。中央公民館では「年少リーダー研修会」を実施しており、次世代の地域リーダーを育成している。次年度は、各公民館でも受け入れ体制を整え、地域で活躍する機会を増やす。

星岡おやじの会（愛媛県松山市）

平岡　剛　氏

当会は、学校ではなく、町内会に属する団体であり、「星岡にすんで良かった」、「大人とも子どもともたくさんの顔見知りを増やし、笑顔増やす」という趣旨や目的に共感したメンバーが参加しており、年代や職種も様々である。

活動の一環として「黄色いハンカチ」プロジェクトを企画し、町内の防災訓練で紹介した。内容は、災害時に黄色いハンカチを自宅に掲げることで「今、うちにいる家族は、みんな無事です！」というメッセージになるというものである。この活動を通して、地域住民の理解や協力、連携が広がっている。

西予市連合青年団長（愛媛県西予市）

岡田　　逸　氏

地元で仕事をしながら青年団活動に取り組んでいる。各単位団では、地域の特性を活かした活動をし、近年では、休団していた青年団体が復団し地域の活力となっている。

西予市には、複数の青年団があるが横のつながりがなかった。そこで、活動を通して人との交流を図ろうと考え、「奈良野天満桜ライトアップ事業」「通学合宿『へらぶな村』」「横林盆踊り大会」などの事業を実施した。団活動は地域の方々も認めていると同時に、見守られている団員は活動していることが社会勉強であり、やりがいである。今後も誰かのため、人のためになることを続けていきたい。

質疑応答

埼玉県春日部市中央公民館

Ｑ１　「公民館に学校が来てください。」ではなく「学校が公民館に行かなければいけない。」と思う。学校と地域社会の壁ができている。北海道では、公民館で事業をしているため「ただいま」と来る子どもがいる。どう思っているのか？

→学校に行く機会が少ない。行きたいけれど行けない。きっかけがあれば連携がとりやすくなる。その一つが放課後子ども教室ではないか。元学校職員の方がコーディネーターになると連携がとりやすい。

→愛媛県でも、公民館とのつながりが強い、弱いと地域差がある。

Ｑ２　サークルの人が事業に参加しやすくなるためにどのようにしたのか？

→普段からの声掛けから始まり、会話が増えていった。そこで、サークルの内容を子ども向けでもできることを知り、実践してみた。その取り組みを少しずつ増やした。

Ｑ３　大洲の公民館では事業を増やすことに課題がある。放課後子ども教室のコーディネーターはどんな人が行っているのですか。

→それぞれの放課後子ども教室にいる。武里小学校では、元学校の教員で、地域や学校のことをよく分かっている方なので、様々な活動に発展することができた。

→大洲市は放課後子ども教室が３つくらいあり、公民館があまりからめていない。今日の実践を聞いていて、様々な人が協力して活動を実施していることが素晴らしいと思った。通学合宿をしているが、少しずつ他の地区にも広がっていけばいいと思う。

Ｑ４　学校側から公民館のアプローチはどのようなことがありましたか？

→地区の体育祭の予定を聞かれる以外あまりなく、公民館側として、もっと学校に関わりたいと思っていた。放課後子ども教室での関わりをきっかけに「総合的な学習の時間」での講師紹介、安全見守り隊の紹介とつながった。他にも、「公民館で子どもたちの作品を展示できますか。」と話があり、公民館のロビーで作品展を実施した。作品展には、親や祖父母、地域の方などがお越しになり、作品を通して、また新たなつながりができた。

Ｑ５　ボランティアはいるのか？

→近隣の大学にボランティアサークルがあり、会員が１２０名在籍している。サークルにボランティア募集の依頼を出し、活動に興味のある学生が参加している。多数の参加があり、非常に助かっている。世代間交流にもなっている。

→大学にはボランティアの募集があり、放課後宿題を教えることや図書館で本を読むことがある。春休みには寺子屋を開いている。これが大学のない地方は難しく、高校生をいかに巻き込むことが将来的に大切になってくると思う。しかし、公民館へ足を運

ぶことが減っている実態がある。そこで、高校生が自主的にできるよう活動している公民館もある。愛媛県では、ヤングボランティアや宇和島東高校、北海道では、地域での話合いで高校生が意見を出し、地域の人たちと討論をしている。橋渡し的な役割が公民館である。

星岡おやじの会（愛媛県松山市）

Ｑ１　子どもたちがどのようにこの事業にかかわってきたのか？

→幼稚園の年長さんに、自分の夢や希望を黄色いハンカチに書いてもらった。掲示もおやじの会メンバーの子どもたちと一緒に行い、掲示の仕方にも子どもの意見を取り入れた。子どもには「自分の意見を大人が聞いてくれ、大人が動いてくれたことを喜ぶ」意識があり、それを大切にしたかった。また、子どもは自分の作品を家族、親や祖父母などに見せたいので、家族で見に来る。そこで、昔からの知り合いと偶然に出会ったり、新たな関係を築いたりと子どもの作品が核となり、交流の広がりや深まる姿を見ることができた。

Ｑ２　「おやじの会」の名称は女性が入りにくいと思うが、名称に対しての反応はどうか？広げていくために、どのように考えているのか？

→確かに「おやじの会」という名称では女性が参加しにくいと思い、当初は他の名称を使う意見もあったが、その当時、ピッタリの名称を選んだ。今後、変更していくことも当然あると考えており、名称には特に固執していない。校区ＰＴＡで組織する「おやじの会」もあるが、私たちが理想とする「おやじの会」は地域住民が組織する姿である。今は、地域の方から名称や活動についてご理解をいただき、女性の参加もあるなど協力してくれている。大人がおもしろい活動をすると子どもたちは自然と将来地元に戻ってくる。子どもたちには「よそに出て、学んで地元に戻ってこい。」と言っている。みんなで星岡を盛り上げていきたい。また、会で親が知り合いになれば子どもが地域で悪いことをしなくなった。本気で子どもを見守り、叱ることができ、地域で子どもを育てることができる。

Ｑ３　働き盛りの世代のボランティアへの参加は難しいと思った。その点についてはどのように考えるか？また、補助金をどのようにもらっているのか？

→世代毎にボランティアに参加する意義や価値があると考えている。大学生はこれから社会に出ていくためにボランティアをとおして様々な経験することが価値であり、退職された世代は、やりがいや居場所を見つけることが意義ではないだろうか。働き盛りの世代については、ボランティアに参加し、人脈を広げることが意義であり価値であると思う。私たちの世代は総じて多忙であるが、人とつながることで仕事面でも得るものは多く、決してマイナスになるものではないと考えている。

　星岡おやじの会では補助金はもらっておらず、町内会からいただいた活動費を原資に、地域のバザー等に出店し、必要な額を自分たちで稼いで活動資金としている。

→埼玉県春日部市中央公民館では、公民館から助成金の情報等を地域にお知らせしている。お金がなければ活動できないので、どのようにお金の工面をするのかをみんなで考えている。

西予市連合青年団長（愛媛県西予市）

Ｑ１　活動にはお金が必要

→もうけるサイクルを自分たちで作るのが楽しみ。自分たちが遣える資金を自分たちで作ることが大切である。発見と学びはどこにでもある。地域にある青年団を大切にしていきたい。

最後に

地域のため、子どもたちのために行動していることが分かり嬉しかった。「人とのつながり」「懇親会」がキーワードとなっていた。今後、子どもたちを地域でどのように育てていくのか。何かを意図的に経験させていくことが大切になってくる。

分散会１５

司会者　　松崎　展也
記録者　　髙橋　里奈
会場責任者　長尾　真二

岡山県岡山市立上南公民館

みんなあつまれ！

大谷　景子氏

上南公民館主催の小学生を対象とした体験学習講座で、企画から当日の運営まで中学生ボランティアが関わっている。夏休みから２月まで毎月行い、平成 27 年度は 9 回実施した。中学生のアイデアや自主性を最大限に尊重することを大切に活動し、今年度は、18 名の中学生ボランティアが参加している。活動の中で、講師として様々な人を招き、小・中学生と地域の人などのたくさんの人との交流の機会も積極的に設けている。子どもたちの感想や様子からは、責任感・協調性・自己肯定感・地域への愛着・達成感など、多くの成果を見てとれる。

泉川公民館　えひめ紙芝居研究会のぼ～る（愛媛県新居浜市）

正岡子規生誕 150 周年記念事業紙芝居出前講座～子規の生きる力・文芸への情熱を、紙芝居を通して子どもたちに伝えよう～

「さくら児童クラブ研修会」から見えてくるもの

篠原　茂氏

2008 年、佐伯美与子代表の紙芝居と正岡子規への熱い思いから立ち上がった。手作り紙芝居コンクール、出前講座（演じ方）、作り方講座、県内小中学校への「正岡子規」紙芝居寄贈などを行っている。泉川公民館での地域に向けた紙芝居の実演や、さくら児童クラブの支援員研修会を、プレ事業出前講座として実施している。泉川公民館の読み聞かせ教室では、保護者に限らず、幅広い年齢層の地域の人による、子どもたちへの読み聞かせを積極的に行っている。読み聞かせの活動は、子どもたちへの有効な成果が見られるだけでなく、読み聞かせを行う人々にとっても、大きな活力となっている。

武智　理恵氏

鬼北町立日吉小学校（愛媛県鬼北町）

「地域とともにある学校づくり」を目指して～コミュニティ・スクールの導入・充実～

松本　智恵氏

日吉小・中学校は、平成 25 年度から、三つの教育制度（教育課程特例校制度、学校支援地域本部事業、学校運営協議会制度）を導入した。家庭・地域の教育力を最大限に生かした小中一貫教育によって「地域とともにある学校づくり」を推進している。①コミュニティ・スクール（地域の声を生かし、教育の質を高める）②小中一貫教育（地域に学ぶ郷土学）③学校支援地域本部（地域の力）の３本柱で、子どもの学びを支えている。会議の精選・効率化を図ることができ、多面的・多角的な話合いの実現や、教員の負担減にもつながっている。さらに、子どもたちは「見守られ、支えられている」と実感し、感謝の思いが高まっている。さらに、地域の活力にもつながって

いる。

質疑応答

みんなあつまれ！

Q1　中学生ボランティアの役割の仕組み（リーダー等）は？

→先輩・後輩はあるが、リーダー等の役割分担は決めていない。小学生をまとめるのは中学生の役割。仕組みとして役割を作ってしまうと、おしつけになってしまうのでは…と考えているため、リーダー等は決めず、中学生に最大限任せるようにしている。

Q2　この活動と学校の教員の関りはあるのか？

→小学校・中学校とも無い。中学生が作ったちらしを学校に持っていき、配布してもらう程度。

Q3　家庭との関わり・つながりはあるのか？

→基本的にすべて中学生の自主的活動なので、中学生自身が保護者に話しているかどうか。親と一緒に活動に来たり、差し入れをくれたりする保護者もいるが、友達と来る子もいる。

Q4　中学生のアイデアを最大限に生かすことは難しいと思うが、気をつけていることは？

→選択肢を準備しておく。アイデアがなかなか出ないときは、その選択肢からアイデアを膨らませてもらうようにしている。また、今までの活動を振り返って、活動と活動を組み合わせることも提案している。（例：平成 27 年度夏…宿題と水風船⇒平成 28 年度夏…巨大プリン作りと水風船）

Q5　活動に必要な費用はどのようにしているのか？予算は？

→講師の方への謝礼金のみ予算がある。それ以外の活動に必要なもの（料理の材料や水風船等）の代金はすべて参加者負担としている。

Q6　打ち合わせの段階で、地域の人や講師の方と中学生は会うのか？

→打ち合わせでは会わない。地域の人や講師の方と中学生との関りは、活動当日のときのみ。

Q7　小学生参加人数は？

→約２０人。活動の内容にもよる。（外で遊ぶ等のときは 50 人ほど来ることもある。料理などの定員が決まっている場合は 20 名程度である。）

Q8　ボランティアに参加したきっかけとして、「小学生のとき参加していたから中学生でも参加したい」という子どもは多いか？

→多い。

Q9　公民館職員の採用は？

→岡山市内公民館の採用は公募による選任職員の採用で、市内の公民館を定期的に移動する。
館長の採用は、①公募　②校長先生の OB　③市役所職員の OB の３つ。

Q10　中学生の部活動とボランティア活動との兼ね合いについて

→学校との連携が最重要である。学校に粘り強く提案・相談しにいくとよい。（月１や、第〇〇曜日は部活動休みなど）小・中学生の活動をそれぞれの学校の先生にも見に来てもらう。（声をかけてもらって帰る、写真を撮ってもらう。）家庭との連携も大切で、家庭にも積極的に呼びかけをして理解してもらい、子どもが地域に出て活動できる機会を設ける。早めに・諦めず・根気強く声かけをしていく。地域の行事には、社会教育と学校とが互いに理解し合い、協力し合う。

Q1　公民館と学校との連携の仕方は？

→地域（公民館）から、学校に積極的に声をかけてお願いをすることが大切。地域課題や時間の制限などはあるが、社会教育の立場がアイデアをどんどん出して、学校の先生に粘り強く声をかけていくことが重要だと考えている。学校側は、地域の人に積極的に学校の中に入ってきてもらい、地域の人と子どもたちに顔見知りになってもらい、つながりをつくることが大切である。コミュニケーション能力の育成にもつながる。

Q2　紙芝居の大切なポイントについて詳しく知りたい。

→紙芝居と絵本の違い

紙芝居…集団の体験・芝居をしながら読む・お話が外に飛び出していくイメージ（扉の開閉が大切）

絵本　…個の体験・淡々と読む・お話の中に子どもが入っていくイメージ

紙芝居は、集団の体験として「共感」を生むので、学級経営などの面でも効果的である。

「地域とともにある学校づくり」を目指して～コミュニティ・スクールの導入・充実～

Q1　県費教職員の人数は？

→県費教職員 10 人。非県費教職員が 1 人。中学校職員の小学校への乗り入れもある。

Q2　学校支援地域本部の地域コーディネーターは誰がしているのか？

→町の委託。打ち合わせの面で、拠点は職員室。非常勤で、週に３～４日勤務している。

Q3　学校運営協議会の委員の選定の方法は？

→全部で 12 人。小中校長・小中 PTA 会長・公民館長（元校長）・人権擁護委員など。

Q4　人事に関する申し出はあるのか？

→一切無い。最初から人事に関する意見の申出は除くということで決めていた。

Q5　今、この制度を導入してみて、どのような時期だと感じるか？

→充実期。導入して２年が経ち、地域が元気になったと感じている。新しく、学校づくり推進委員会を設け、事務局を担当している。学校の統廃合が進んでいる中で、「地域に学校を残したい」「活力をつけていきたい」という思いからできた。

Q6　日吉小・中学校はとても熱心にしているが、同じ町内の他の小・中学校との差は？

→最初は、「まずは、やってみよう」という思いから、パイロット校になろうということで始めた。現在、仕組みが確立し、成果も出てきていると感じている。そのため、今年町内の３つの小学校がコミュニティ・スクールになった。来年度は、残り２つ小学校と１つの中学校もすべてコミュニティ・スクールになる予定である。これらの学校とは、仕組み等について積極的に情報交換も行っている。

Q7　他の市町との合併や、統廃合の問題はないのか？

→学校運営協議会の委員の人の中に、行政関係者も入っている。仕組みをしっかり整えて、取組を確実に行っていくことにより、「日吉の教育を残していけたらいいな」という思いをもって行っている。

Q8　コミュニティ・スクールを導入する上で気をつけていることは?

→誰を学校運営協議会の委員として推薦するかどうか。公民館の社会教育主事に入ってもらうのもいいかなと感じている。学校・地域・家庭が情報交換をすることができ、連携が充実できるように配慮することが重要である。仕組みを確立していくことも大切。そして、委員が協議会で意見を言い合うだけではなく、委員が意見を出し、委員自身が実際に動いてくれるようにならなければならない。

めざましトーク

地域の教育力を高める新しい風

平成 28 年 12 月 4 日（日）
9：00〜10：30
国立大洲青少年交流の家
大ホール

参加者：181 名

聞き手：若松　進一　　地域教育実践交流集会　実行委員長
語り部：松田　淳子　　秋田県北秋田市教育委員会生涯学習課
　　佐藤　房枝　　福島県社会教育委員
　　鍵山　直人　　愛媛県松山市立堀江小学校 PTA 会長

若松：今回の大会では、若い人がたくさん集ってくださった。嬉しく思う。まずは、フロアから、昨日の感想を伺いたい。
大学生（尾道）：分散会では、地域の方の力が強いと感じた。大学生の力も必要と感じたので頑張りたい。また、自分の言葉で語れるようになりたいと思う。
双海町の青年：交流会が終わって、長い夜がとても楽しかった。双海では若松さんの少年のようなまなざしをいつもみている。楽しみにしていることが多い。
若松：インタビューダイアログとは、登壇者も参加者も平等な立場に立って話し合い、新しい考えや学びを分かち合うということ、話をフロアにふることもある。また、登壇者の話に意見等があれば、遠慮なく手を挙げてほしい。そのような感じで、この会を進める。
　というわけで、会場のみなさんに、「地域の教育力とは〇〇である」と自分で思うところを 1 分間で書いてもらいたい。スタート！
　余談になるが、大洲市の白滝から来られている中村さんは身長が 2 メートル。わたしとは目の高さが違う。そうなると、見るものも考えることも違ってくる。自分という人間に問いかけた地域の教育力とはなにか、考えてほしい。

登壇の方々に、最初、3分で自己紹介、最後は新しい風とは何かを考えていく。

佐藤：福島、会津坂下町から来た。15,6年間公民館職員をしていた。今年4月からは家族でトルコキキョウ、カスミソウなど花の栽培をしている。息子も大学を卒業して、家に帰り、手伝ってくれている。今回は、社会教育協議会に属している立場から、福島の子どもたちの活動を紹介する。山の中で暮らしている子どもたちの地域活性化の話である。過疎化によって学校がなくなる、地域がなくなるという、問題をかかえていた、全校生徒12名の中学生が、お土産を開発して地域を元気にしていった過程を話したい。
若松:佐藤さんは、官から民へ変わって考え方が変わっていったということもあるかもしれない。そのような話も聞けると面白い。

松田：秋田県北秋田市からきた。少子高齢化の先進県でもある。高齢化率40パーセント。北秋田市の生涯学習課で人と人、人とモノ、人と町をつなぐという仕事をしている。市民の笑顔をつないでいきたいと思っている。
　昨年度この会に参加して新居浜の関さんと知り合った。今回は、そのご縁で、新居浜南高等学校ユネスコ部の別子銅山ガイドと、北秋田市の山間の町阿仁合地区阿仁合小学校の阿仁鉱山観光ボランティアガイドが交流した話をする。阿仁合小学校は全校児童~~15~~31名、ボランティアには5、6年生15名が参加した。

鍵山：松山の端に位置する堀江小学校のPTA会長をしている。全校児童が600名ほど。今日は2つの話をする。一つは学社融合が地区の基本理念であること。地域と融合しながら活動をしている。もう一つはおやじの会。OBに教えていただきながら、活動を続けている。元気なおやじたちをどう活かすか考えている。

若松:特徴ある活動、活動をもたらす成果について
佐藤：中学生が地元のお土産を開発した。学校の総合の時間でひしを作ったことが始まり。もとは地区の伝統工芸品。ひしをかわいくして、地元の温泉旅館で売ってもらっている。PTAと学校ぐるみの事業である。生徒たちがデザイン企画をする。作ってくださるのは地域のお年寄り。子どもたちは、キッドをお年寄りの家まで渡しに行く。お茶をいただきながら、何か困ったことはないか等、話をして帰る。文化祭で生徒が作ったひしが好評で、注文依頼があった。しかし、中学生はそんなにたくさん作れないので、地域のお年寄りに頼んでいる。
若松:高齢者と子どもたちとの交流は
佐藤：生徒が地域の資源を探しに観音堂に行ったとき、ぶらさがっているひしを見て、これは何かと。「子どもの健やかな成長を願うもの」と知って、これを売り出してみようと考えた。しかし、作り方が分からない。当地区は過疎地域で一人暮らしの年寄りが多い。ひ

しを知っているのは70歳以上の方々である。生徒がお家を訪問して作り方を教わった。そのことが特産品を生むきっかけとなった。売り上げは、子どもの活動資金にしている。
若松：地域が知らず知らずのうちに、活性化した例と言ってもいいだろう。

松田：北秋田市では学校が15校、学校支援地域本部事業を行っている。市民全体で子どもたちを見守っている。阿仁合小学校の総合学習の時間、ふるさと教育をした。地域の子どもたちは大きくなると、北秋田市から外に出て帰ってこないことが多い。いつか故郷を思い出して、帰ってきてもらうことを願って企画している。
　阿仁合地区は鉱山で栄えた町。文化が根付いている。「阿仁鉱山を学ぼう」という機会を設けた。子どもたちから、覚えたことを誰かに伝えたい、ガイドをしたいという要望があったので、地域おこしの一環として、「阿仁鉱山観光子どもガイド」をつくった。先生は73歳。観光ガイドとして年に5，6回、学びの成果を披露している。今年、新居浜南高等学校のユネスコ部のみなさんとの交流が実現した。
若松:関さん橋渡しはどのようにされたのか。
関：昨年の、この場でそのつながりができた。交通費等経費も必要で難しいと思っていたが、市長部局との連携によってこの事業をすることができた。新居浜の高校生と遠く離れた北秋田市の小学生が新しいつながりができるとわくわくした。
若松:去年のこの会は感動の場面がたくさんあった。松田さん、地域を越えて、愛媛県とつながってどうか。
松田：鉱山のことなら何でも聞いてという人がいる。その方から、別子銅山とは昔からつながっていたと教えていただいた。ご縁だよとも。いいかたちの奇跡が7月23日に起こった。

鍵山：堀江のキーワードは学社融合。いっしょにしている事業は、泥んこ大会。田んぼを使って泥だらけになる。地域の人も参加する。ふれあい自由体験。地域の方に集まってもらって子どもと楽しく遊ぶ。遊びは昔の遊びに近い。地域の人に集まることで、お互いに顔が分かって、あいさつをかわせることができる。
若松定着しているのは
鍵山：防犯上のこと。高齢者の方は時間に余裕があるので、下校時等、児童に声をかけてもらっている。また、まちづくりを核としているので、安心安全が広がっていく。

若松:3人の話のバックボーンとなるものの話を聞いた。今度は、こんなことを話したいというキーワードを聞かせていただきたい。
鍵山：子どもたちと地域のお年寄りで餅つき大会をする。お年寄りと遊びを通じて交流を図る。顔が分かることで、災害の折など、救命につながる。2つ目はいままでなかった人材、おやじの会を立ち上げた。女性の多いPTAの中で、男性の力は貴重な存在。

若松：地域の教育力が必要ということ。問題点はないか。
鍵山：高齢者の方は思いが強く、集合時間など、なかなか言うことを聞いてくれない。こちらもお願いをしているが、マイルールでしてしまう。若い者が理解していかなくてはいけない。遊びは、シンプルで単純なものを作って遊ぶ。保護者や高齢者がわいわい言いながら楽しくやっている。
若松：学社融合とのこと、学校との関係はうまくいっているか。
鍵山：協力をしていただいている。堀江小学校では、こちらの話をだいたいにおいてかなえてくれている。

若松：佐藤さん、子どもの学力、ふるさと愛、地域について話してほしい。
佐藤：学力っていったい何なんだろうと思う。教育委員会の重要課題だが、学力が高い子どもは結局のところ、地元を離れてしまって地域に戻ることはない。先ほどの西山中学校の生徒は、中学校卒業後、高校へ行くために家を出て下宿をする。子どもにとって学力が高いことは自己肯定感につながるが、地域にとっては過疎化の原因となる。身に着ける学力とは、テストの点ではなくってなんなんだろう。みんなで考えていかなくてはいかないことだろうと思う。
若松：佐藤さんはどうでした。
佐藤：東京には出たものの、結婚で地元に帰りました。
若松：出世をするのがいい子どもと言われていたが、本当にそうか。そういったことを、誰が気づくのか。
佐藤：子どもが気づくこと。若者が少ない、地域に残らないというが、いきなりじゃないと思う。どんなふうに大人が子どもとかかわってきたかということ。小さいころから種まきをしないといけない。どのような体験をして、その体験が心にどのくらい占めているか、大人が押し付けるのは無理がある。
若松：地域の課題でもあり親の課題でもある。
佐藤：ふるさとの宝、自分の地元に関していろいろなことを知る。伝統文化や、資源、それも大事だが、ふるさとに愛着を感じるきっかけは人から。お年寄りのお宅に伺って、どんなふうにかわいがってもらったか、心に残れば愛着につながるのではないか。
　私は、農業は素人なので、家で仕事をしていると人とかかわらない。子どもたちとのかかわりも遠のいている。自分から積極的に出ていって、うちのビニールハウスが公民館のようになったらいいなと思っている。
若松：暮らしの中に、社会教育を入れていく。自分の家業が子どもたちのふるさと教育になればいい。

松田：こういった講習会に出て、ヒントをもらいたい。
若松：社会教育に従事していた時代は、このような場に出ないと思っていたが、本当のとこ

ろ、暮らしの中にある。子どもは道草をすることによって、未知の感触を得、一声かけたりふれあったり、その中で変わっていく。社会教育的発想が変わっていくとまた変わる。
松田：阿仁合小学校の５・６年全員で、新居浜南高等学校ユネスコ部を迎えた。底力は地域。子どもは外に向かっている。忘れてほしくないふるさとのこと。学校の総合学習の中で子どもたちは自発的にかかわって5年目になる。最初は恥ずかしくて何も言えなかったのに、終わるころには立派な意見を言えるようになった。地域に響いている。地域に子どもたちの活動が浸透した。
　阿仁合駅が80周年を迎え、地域でも盛り上げていこうということになり、子どもたちの鉱山のガイドが始まった。小学校6年の先生は、もじもじしていた子どもが、りっぱに観光ガイドとして成長している姿をみると、教師としてもやりがいがあると言われていた。
子どものメッセージ　抜粋
「夏、ボランティアガイドをした。知らない人に、名所とか一緒に回りながら解説をする。今まで、知らない人に話しかけることがなかったが、案内しているうちに自分から話しかけるようになってびっくりしている。お客さんが喜んでくれて、うれしかった。最初は、嫌だなと思っていたが、いろんな人と歩くうちにこれもいいなと思えるようになった。小学校卒業するので終わるが、機会があればまたしたい。新居浜のお兄さん、お姉さんの前でガイドができて嬉しい」。
年の差はあるが、とてもいい機会になった。
午後は、秋田大学海外鉱業研究会と新居浜南高等学校ユネスコ部と交流をした。小学生と大学生をつないでくれたのが、新居浜の高校生である。
若松:ぼくたちのやっていることがただしいという気持ち、年上との交流とギャップが成長させてくれる。

鍵山：今まで、PTAメインで考えていたが、地域全体で考える、力強いと思った。
佐藤：秋田と過疎の話で共通点があった。鍵山さんのいう児童数600名は私たちにとっては大きな学校。おやじの会、集まってやっているのを見てみたいと思った。
若松：会場にえひめおやじの会の方が来てくれていると思う、どうか。
佐川：オレンジのティシャツ軍団でやってきた。地域と学校をつなげるパイプ役をしている。きがるに話せるおやじとして。できるものと思っている。
佐藤：昨日、もっと、詳しく聞きたいと思った。おやじが動くことにより、お母さん、地域も動くのだろうなと。学校の子どもたちはかわいい、このまま大きくなってほしいと思う。成長していく過程に少しでも多くの大人にかかわってもらいたい。子どもを中心としてつながっていくまちづくりがいいのだろうなと思った。

若松:テーマに沿っている。これから、フロアに振りたい。ご意見はないか
大畑：取り組みをお伺いした。地域への広がり次の展開を考えているのか。

鍵山：PTA の力だけでは難しいので、各種団体にお願いする。まちづくり協議会とかそのほかの団体などを利用して地域につなげていきたい。
市職員：いろいろな団体、企業等、魅力あるけれど、どうつなげればいいか。地域と子どもとのつながりを共有する場を設定できれば。
佐藤：校長先生は、タイの日本人学校に赴任されていたことがあった。小さな中学校で、2 人の教員は起業家。3 年間で子どもたちに成果があった。見つめなおす機会。地域を出て生活することしか頭になかったが、残る選択肢もあることを知ってほしい。年寄りは生きがいが必要。緊急時にはお年寄りの手助けができる。継続は、公民館とか環境協会等、展開していけばいいのではないか。
中尾：どうすればより質の高い学びができるか、というのは日本も外国も同じ。外国の人は職業意識が高い。日本人は思いが先行している。少し感じた。
松田：学校もオープンになっていく。地域もオープンになればいい形ですすむ。地域の許容力をつけていく機会を拡充していきたい。人材育成。子どもの人数は減っても、元気な高齢者が多い。元気でいれば、地域のためにまだまだやれるぞと思ってくれる。学校を核としながら、まちづくりを推進する。行政としては、仕掛けが必要。賛同してくれる地域人を巻き込んでいく。
尾道大学生：地域の取り組みに期待するところは多いと思うが、大学生の立場として求められることを教えてほしい。
松田：とても嬉しい。秋田大学(秋田市) とは、車で 90 分ほど離れている。北秋田分校では、田植え、除草、稲刈り等、1 年を通じてかかわってもらっている。小学生や中学生、地域の方との交流もある。スタッフは大学生が来るのを待ちわびている。宿泊をしたり、温泉に連れて行ってもらったり交流している場を見せてもらうのもいい。
佐藤：以前、公民館勤務していた。福島大学の学生、授業の時に来てもらってボランティアしてよとお願いした。以来、ゼミの学生は卒業すると次の人に引き継いでくれている。通学合宿のときは、公民館に寝泊まりして、ジャガイモ、花の種、収穫等してくれる。自分も体験するんだという気持ちがあるようだ。子どもは、大学生とふれあって、中学に上がるとボランティアをしますと言ってくれる。大学生のお兄さん、お姉さんがかっこよかったから、自分もしたいと。あこがれの対象となっている。
鍵山：地域のニーズ、自分たちでやることをプレゼンするとか、実際いろんなことをやってほしい。負担が重くなってやれなくなるのではなく、自分たちのやれる範囲で。あとは継続できるものかどうか。地域の要望に応えるというのは大切だが、本分をおいてまでもはどうかと思う。
若松：中高年が元気、なぜ元気か、金と暇と好奇心。大学生は金なし、暇なし、好奇心なし。人それぞれ地域の教育力が違う。最後に未来のメッセージをお願いする。
鍵山：保護者等を地域に出していきたい。PTA の活動を通して、地域活動へシフトしてほしい。

佐藤：どのような大人になっているのか。子どもがあこがれてくれる大人へ
松田：学びあうことが大切。世代を越えて学び合い地域への思いを伝える。
若松:昨日のアトラクション、継獅子に感動した。土台の大人が肩に子どもを乗せてさらに子どもを乗せる。つないでいくということはこのようなことを言うのだろう。本会も 9 回目となる。継続の力となっていると思う。最後に、中江藤樹の五事を正すを紹介する。

普段の生活やまわりの人々との交わりの中で、

「貌」なごやかな顔つきをし、
「言」思いやりのある言葉で話しかけ、
「視」澄んだ目で物事を見つめ、
「聴」耳を傾けて人話を聴き、
「思」まごころをこめて相手のことを思いやること、

これが人が生まれながらにして持っている正しい心を高める道であるということ。

特別企画

異業種交流会は意義があるか

廻し人：鈴木　眞理
指定討論者：三浦　清一郎
　　成田　みえ
　　佐藤　秀雄
　　関　　福生

鈴木：実践を持ち寄っての会と理解する。それぞれの地域で会をする。あるいは、人様のお金を回している。どのように活性化しているか。課題を検討する。今回は、打ち合わせをしていない。どのような思いで活動をしているか、経緯について話をしてもらう。

三浦：35 年前に福岡で愛媛の実践交流集会のような会を始めた。組織的な評価の視点はない。自分ではなかなか納得がいかないことも、持ち寄ってお互いに評価し合うことによって元気が出る。実践家は孤立している。大学にも案内を出して大学の先生にも来ていただいたが、理論的に批判する。腹に据えかねたこともあり、学校の先生は呼ばないことにした。
鈴木：福岡県立の生涯学習センターで 5 月の第 3 の土、日に開催されている。意図を持った企画である。いくつかの事例発表がある。
　さて、わたしはどういう人間かというと、好奇心の一点だけ。野次馬であることを周知していただきたい。
成田：西日本で話をするのは初めて。公民館に真剣に取り組んできた。平成 19 年、市町村合併、公民館はいらないと言われた。公民館主事はなにも言えなかった。2 年ほど、110 くらいの市町村に行き、なぜ公民館が必要でないのか聞いて回った。
　私生活では、孫がいじめにあって苦しんでいたこともあって、地域が、公民館が頑張らないといけないと思った。
鈴木：活動について教えてほしい。
成田：若い人や公民館長、職員、教育長や首長も参加して知恵を出しながら研修をしている。首長は社会教育の勉強をしたことがないので、勉強会を催したところ、30 名の参加があった。来年から、副首長も呼んでくれと言われている。
関：この会（愛媛の地域教育実践交流集会）を始めたのは、9 年前。どうして始めたか。それまでは、子どものことにかかわっている人たちのつながりはあったが、みんなが集まって話をするような場がなかった。不安や悩み課題等、他の団体と話し合う場が必要ということで始めた。行政の手は借りなかったので、何のしばりもなく自由に発言ができた。民間の開催であったので、参加者はすべて手弁当である。県内に呼びかけていたが、いつのまにか、輪がひろがり歴史ができた。人が集まることに意義があるのか、深めていきたい。

いろいろな思いを伝える場が必要だなと改めて感じている。
　昨年と今年度の2回、文科省の助成金をいただいて、県外からもたくさんのお客さんを招き、いろいろな実践を聞くことができた。
佐藤：私自身の簡単なプロフィールを紹介する。国立青少年交流の家で採用された。大学生で社会教育を知り、以来、生涯学習・社会教育の場で仕事をさせていただいている。現在は文科省社会教育課に席を置き、その事業の関係でここにいる。
鈴木：9回のうち2回は文科省のお金でやったと言われたが、たかだか、2回。このような集会にお金を出すようになった経緯を教えてほしい。
佐藤：それまで、公民館GPという事業があった。公民館でいいことをやっているところを紹介していたが、地域に任せてしまいなさいと切られてしまった。それで、公民館の成果を考える会として、様々な立場の人が集まり、気づくようなそのような会にお金を出してくださいと。この委託事業についてざっくばらんに話した。
鈴木：国も、様々な問題をかかえている。このような会にお金を出した方がいいと考えたということだろうか。
　福岡も公式な研究組織として文科のお金を貰ってやっている。ということは、愛媛の例とは少し違うかもしれない。それぞれがどんな工夫をして進めてきているのか。どのあたりに課題があるのか、職員の悩みや思いにつなげる。その思いが、自分一人のものではない、どのように共有するか工夫する。他の地域の事例、課題、自分たちの事例をどう深めていくか。行政はどのようにしていくのか、話を聞くことにする。
三浦：日本生涯学会に参加したことがある。やったことがないのに、理屈ばかり。「おまえがやってみろ」というのが印象だった。そのこともあって、福岡では、「実践なくして発言権なし」で実践家だけを集めた。金を貰うと出した人が口を出すだろうと思い、自分たちで開催することにした。交流会で競り市をしているが、一銭もない私たちに地域が物を持ってきてくれてそれを競りで落として資金の一部にさせていただいている。その伝統が持続力をもたらした。同じようにがんがばっている同志に絆が生まれ、くじけずやっていけた。毎年、5月の第三土日と日時を合わせることで、計画を立てることができた。同志に会うことがエネルギーの源になっている。
関：職員というかたちではなく、むしろ、自分たちの活動の一環として、地域の中で活動している人にスポットをあてた。同じような立ち位置で活動している人ばかりだと、不満等、傷をなめ合うようなかたちになりやすい。他の立ち位置の人がいることによって、違う道が見えてくる。
　立ち位置と関係性としては、人がつながることによって、1の活動が2～3へとなる。この会で知り合った「特定NPO法人えひめいぬ・ねこの会」と新居浜がネットワークでつながった。先ほどの『めざましトーク』での秋田の鉱山もそう。同じ釜の飯を食って、語り合うことで次のことを生み出す。また、自分たちのことを客観視できる。北海道と西日本では考え方が違うということを知る。カンファレンス事業を受けたことによって、つなが

りを確保できたと思う。交通費など負担がかかることもあるが、この事業を認めてくれるのなら、全国とつながることができる。呼び水にこのお金を使う。自分の身の丈に合わないことをするとしんどい。愛媛の地域教育実践交流集会も 10 年を一区切りとして、今後、どのように展開していくか探っていく。壁にぶちあったたら、違う方向で考えていきたい。

鈴木：地域の実践家とのかかわりは
成田：わたしだけが民間人だったが、行政が私の考えに耳を傾けてくれた。社会教育プロジェクトで、関さんが北海道に目を向けてくださり「他県の考えも聞いて、北海道はどうあるべきか考えましょう」と言ってくれた。
　個々の公民館へ町の特産をつくろうと呼びかけた。ある町では、メープルシロップを作り文科省の補助金を貰い、自分たちの村のために使った。いろいろ言われたが、そのことが北海道公民館協会の土台になっている。自分のところで事業をするときは、行政マンと地域の人の意見を聞いて組み立てていく。無駄遣いはしたくないので、研究だけのために先生は呼べない。現地に行って足を運んでくれる人しか使わない。海外のコミュニティセンターで、日本には公民館があって、そこで社会教育をしているよねと言われた。行政と民間がタックを組んで事業をすると必ずうまくいく。
佐藤：いろんな方々が、参画することによって、防災や健康福祉においてもつながりができる。社会教育がつなげている。地域の課題解決は、社会教育という場を借りて、異業種が交流することにより、いろいろな気づきがある。文科省に持ち帰り、情報交換をして、行政にも生かしていきたい。コンファレンス事業で、どんな気づき、課題があったか、行動に移していく。国民の税金を出しているから、成果があったかどうか、きちんとかえしていかなくてはいけない。集会の持ち方においても、目的は何か、逆算して考えないと。
鈴木：行政の役割、行政との連携、行政との連携はそんなに簡単なものではないと思っていた。本質的なもの、ルールが違う。行政とどのような関係を持つかという話を聞きたい。
三浦：どの部署とつながるかによって違う。福岡でも、最初の 2 年間は大学で開催して、別の所に泊まってだったが、行政との連携によって生涯学習センターを借りることができた。他県の人のためになぜ、貸さなければならないかともいわれたが。
5,6 年経って、生活を支えているのは異業種だと知った。にもかかわらず、社会教育は手も足も出ない。それで、「生活にかかわる人に来てもらおう」とした。年寄りや子どもにとっても、生活をよりよいものにするためにかかわってくれている人たち、例えば、おやじの会の人たちは、生活を支えながら、子どもにかかわってくれている。
関：今回も愛媛の大会に参加してくれている尾道の大学生は、自分の道を選択する前の人たち。いろいろな人とつながって、影響していくのだろうと思う。ここでつながった人が将来活躍していってくれる。大学生の意見等聞いてみたい。
鈴木：当然、行政とは敵対するものではない。島根の方では、「自分のところでもやってみよう」と実践されている人がいる、大畑さんの事例を発表してほしい。

大畑：益田市の教育委員会で働いている。15 年前に福岡で発表の機会があった。自分たちのやっていることが評価されたと思った。また、他でもやっているという安心感。もっとやるぞと思った。「隣の芝生は青い」、遠くの人に来ていただいて、評価してもらう。地元のメンタリティにとって、とってもいい。地方都市にメリット、他の人が来てもらうことによって元気になれる。
鈴木：徳島大学の馬場さんが来られている。全国の交流集会、これからは必要になるのではないかとおもうが。
馬場：地域で頑張っている人をどう全国で、抜粋していくか。国の役割で発信していかなくてはいけない。東日本を含め、このような会があちこちで出てくればいい。東日本ラインは新潟で開催したのが最後の仕事だった。個人的には、国のお金をつかわないほうがいい。行政は口をださない、民間でやった方がいいと思っている。今、社会教育は、行政ががんばっているところよりも、それ以外の方が目立っている。お互いが持ち寄ることによってステップアップにもつながる。公民館 GP なども、こんなにがんばっているところがあると、国が引っ張り上げて、抽出すると、公民館事業とはぜんぜん違う方向になることもある。
す：茨木の方で、県の行政が中心になっているところもある。このような集会を国社研で開いたこともある。成田さんのところのように、行政の職員が中心、異業種だけれど、OB とつながっているところもある。国の機関が一緒にするのは大それたこと。福岡から、大畑さんのような人材が現れたみたいな、ネットワークができればいい。実行委員会は当初の目標を達成されたのか。創業者がやろうとしたことがいいのかどうか、変わっていくことをどのように評価しているのか。
三浦：会の提案をした。2 代目はこの会に一緒に来ている。金を使うにはきちんとした報告が必要。結成 10 年で 1 冊の本を出した。それぞれの分野が異なっても、未来は何を必要としているかが大切。特別企画を考えるときは、この 10 年、未来に必要なものを出してきた。違ってきているがそうでないと進化しない。首長を集めたことがあったが、研修生として集めたことはない。成田さんのされた研修はお見事である。
鈴木：公民館を他に広げていくと行く発想について、きっかけ、基盤について教えてほしい。
成田：研修してくださるのがどのような先生にもよる。社教主事は、首長と話したことがない。首長にすぐ話しにいけれるタイプがいい。3 分の 1 が社教経験者。箱ものでなくてもできる。しかし、社教主事はそのようなことができない。いろんなことがあったはずなのにできない。なぜできないかを首長に気づかせて、社教主事に問いかけてほしいと討議の折、先生にお願いした。社教主事が必要なのに減っている。研修の中で会長がかわった。社教主事の必要性が分かってくださったようだった。
鈴木：まともな社会教育主事がいるかどうか。きちんと自分のしたことが分かっている人が少なくなってきている。分かっている課長補佐がいない。異業種交流会はいいと思うが、

私たちの発想はそこのところにある。きちんと考えながら、必要かどうか、考える必要がある。
関さん、変えようと思うときはどんな時か。
関：ここでは、地域教育という言葉。地域とかかわっていくことで、より良い力を育んでいく、学んで、地域に戻していく力がいる。行政そのものが、いかに幸せな人生をおくることができるか、住民、市民も当事者として、かかわっていく力がほしい。実践重視は間違いないので、整理していく作業がいる。整理していく作業は、学びのコミュニティ研究所というシンクタンクがあるので、それをもとに次のステージへコマを進めたい。
鈴木：この 2 日だけで終わりではない。地域教育を民間レベルで考えていくということか。行政レベルとしてかかわっているが、行政らしくない形で。
この集会は、どうなっていくか、こうあってほしい、意見があれば聞きたい。
尾道の大学生：この地域教育実践交流集会をなくしてほしくない。初めて参加させていただいたが、いろんな社会人と交流できていい刺激となった。おやじの会の方々とも仲良くさせてもらった。自分は周りに流されやすいので尾道を出るとき、四国へ行って周りに流されるなと周囲に言われたが、こちらへ来てそういうことではないと思った。
双海町の人：やっていってほしいこと。ここに参加している人は、経験値が上がっている。地域に落とし込むときに、解離することがあると思うが、目線をどの位置に合わせるか、議論を深めていってほしい。
鈴木：まずは、そう思うあなたがしていってほしい。このような集会がどんどんひろがっていけばいい。一番面白いのが、ずっとかかわってきている人、関係者をきちんと見ていないといけない。作っていく面白さやどう継承できるかできないのか、できないのなら、辞めてしまえばいいと思う。そうすると、また、新しい人がつくる。
三浦：新しいものを付け加えていかないと、会は崩れる。どうすればいいか。
古市：福岡の森本、三浦、続いて 3 代目です。10 回目から出てきたのは、「町おこし」。社会教育行政関係以外の人たち、NPO とかの対象者を見ていると、いろんな人がいる。地区でも県域を越えたところのシステムができればいい。民間も一緒になって取り組む。35 回目に向けていろいろ考えている。

① 法律は、社会教育の定義。厚生労働省管轄で誰も手を出せない。学童に教育プログラムをいれる。引きこもりは 70 万、155 万が予備軍という。社会教育の新しい方法で、引っ張り出す必要がある。

② 会員も増えたので、変えていかなくてはいけないのは、ワンランクアップした考え。社教主事の研修等、元気になっていただく。

② 行政はおじゃまにならないように役に立ってもらう。事例を持ち寄る中で、表面的なところ等、このようなところが困っているとか、アドバイス、掘り下げていけば、持って帰るお土産ができるのではないか。

③ 意義があるかどうか、参加する人それぞれ、つながることによって、設けるような会。

自分から積極的にかかわっていく仕掛け。企画段階で、わたしやってみたいというひとを募ってやる。それができれば、10年以降脱皮をしながらやっていくことができる。

鈴木：三浦先生締めを

三浦：ビジネスができないときは、アウトソーシング。その発想は、社会教育にも必要。影は、NPO等、行政はそこにお金を出せばいい。